

<高校日本史講座>

歴史を学ぶ心持ちの一つに、私は、生きようとする意思を強く持ちながらも、その願いを断たれた無名・無数の人びとの声を掘り起こし、その声を後世に伝えたいという思いがあります。(もちろん、多くの人びとにはその人固有の名前がありました。)

今回のシリーズ「人物編」は、受験学習を視野に入れているためどうしても有名人になりますが、できる限り従来のイメージにとらわれず眺めたいと思います。

取り上げる人物としては、6世紀～江戸時代は1世紀に1人あるいは1組とし、近代以降は数名ほどとします。

- 6世紀－大王継体と磐井、7世紀－持統天皇（アジアと女性の王）
- 8世紀－藤原仲麻呂（錯綜の人生と奈良朝）、9世紀－菅原道真
- 10世紀－源信、11世紀－源頼義、12世紀－後白河法皇
- 13世紀－北条時頼、14世紀－足利尊氏・直義（頼朝・泰時の後継者）
- 15世紀－山名宗全、16世紀－織田信長、17世紀－徳川光圀
- 18世紀－田沼意次、19世紀－島津斉彬・久光

))))))

♪高校日本史講座☆1360（2009-10-14）

○●)))))

●○

09年テーマ史：「日本史受験重要事項8（人物編1）」

(((((

人物編1「大王継体と磐井」～6世紀の争乱～

1. 大王家（皇室）の始祖

「現在の皇室の始祖は誰か？」

こうした質問を受けたとしたら、私は「100パーセントとはいえないかもしれないけど、6世紀初頭に登場した大王 {おおきみ} の継体 {けいたい} かな」と答えることでしょう。有名な人物との比較でいえば、厩戸王（聖徳太子）の曾祖父にあたる人物です。

『日本書紀』（以下『紀』）によれば、6世紀初頭、「倭の五王」の同族・子孫と思われる大王武烈 {ぶれつ} が死去します。『紀』は武烈を中国の殷 {いん} の紂王 {ちゅうおう} にも似た残酷非道、酒池肉林の人物として描いています。

こうした記述については、『紀』を編さんした7～8世紀の日本の支配者が、旧王朝を悪く書く中国史書の編さん方針をまねたとする説が有力です。『紀』は続けて、武烈の死後、大伴金村

{おおとものかなむら}、物部麁鹿火 {もののべのあらかひ} らヤマト政権の有力者が、大王応神 {おうじん} の5世の孫（曾孫の孫）で、近江から越前、尾張・美濃などとも関係をもつ男大迹 {おおど} を次期大王に迎えるという行動をとります。この男大迹こそ継体天皇です。

『紀』とほぼ同時期に編さんされた大宝令は皇親（皇族）を4世孫（4世王）以内としています。（706年の格 {きやく} で5世孫までを皇親としました） これらのことから、大王武烈が旧王朝に属し、大王継体が旧王朝とは関係が薄い人物であるという認識が200年後の『紀』編さん者にあったことが推測できます。

いずれにせよ、現在の皇室が6世紀の大王継体の子孫であることは、このことだけでも世界史上では比類のないことではあります。

継体の即位事情とその後-----

継体は、6世紀初頭に58歳で河内国の樟葉宮 {くすばのみや} で即位し、大王武烈のきょうだい手白香 {たしらか} を妃にします。しかしその後も大和には入れず、ようやく大和に入ったのは約20年後（西暦526年とされます）のことでした。継体の死はそれから5年後のことでした。

継体の死後、いずれも継体の子である安閑 {あんかん}・宣化 {せんか} の両大王と欽明大王のそれぞれの政権が対立したとする説が有力ですが、やがて権力は欽明側に一本化されます。

以後の大王（天皇）は全て継体・欽明の子孫です。（「 ）は子孫なく断絶。

継体—欽明（母は手白香）—敏達・用明・崇峻・推古（敏達の妃）

→用明—厩戸王（聖徳太子）—山背大兄王」

→敏達—○—舒明（妃は皇極・斉明）—天智・天武

→天智（母は皇極・斉明）—持統（天武の妃）・志貴皇子

→志貴皇子—光仁—桓武→今の皇室へ

→天武（母は皇極・斉明）—草壁（母は持統）—文武—聖武—孝謙（称徳）」

2. 磐井の反乱

『紀』は、大王継体の時代の出来事として、九州に覇をとなえる筑紫国造磐井 {つくしのくにのみやつこいわい} の反乱記事をのせています。

現在も、この反乱発生年を527年と記す教科書がありますが、仏教公伝年について『紀』記載記事（552年）を疑問視しているのに、それよりも前の磐井の乱の発生年を特定することは不自然です。（530年代説もあります）

磐井は、新羅と結んで近江毛野 {おうみのけの} が率いる朝鮮半島への出兵軍の行動を妨害し、その後約1年半ものあいだ、筑紫（今の福岡県。のちに筑前・筑後）、火の国（今の佐賀・

長崎・熊本県。のちに肥前・肥後)、豊の国(今の福岡・大分県。のちに豊前・豊後)を支配下におき、高句麗・百済・新羅・加羅諸国とも独自に外交を行なうなど、独立国家を築きます。

大王継体は、「筑紫の磐井、そむきおそいて、西の戎{ひな}の地{くに}を有{も}つ」と述べて、事態を深刻にとらえます。(磐井の乱が527年であればこの時の大王は継体ですが、530年代ならば継体でない可能性があります。)

やがて物部麤鹿火の攻撃を受けて磐井は敗死します。磐井の子が献上した九州各地の領地に屯倉{みやけ}が設置されます。物部・大伴など中央豪族は磐井の私有民を奪い、みずからの部曲{かきべ}にしています。

磐井を葬った古墳が石人・石馬で有名な岩戸山古墳(福岡県八女市)で、被葬者(葬られた豪族)の名と古墳、時代が判別できる数少ない古墳の1つです。

九州が再び独立王国をめざして中央政府に抵抗したのは、磐井の乱を『紀』の527年と仮定して1350年後の1877年、西郷隆盛による西南戦争でした。

磐井も西郷も中央政府に出仕した経験をもつ点や、その死後中央政府による集権化が進んだ点で似ています。

同じ釜の飯-----

若き日を共に過ごしたことを「同じ釜の飯を食べた」などといいますが、これに似た言葉が、反乱を起こした磐井がヤマト政権軍を率いてきた近江毛野に述べた言葉の中にあります。

「今為使者。昔為吾伴。摩肩触肘、共器同食。安得率爾為使、俾余自伏爾前」

(今、お前はヤマト政権の使者になっているが、昔は仲間として肩や肘をすりあわせ、同じ食器で食事を一緒にした仲ではないか。使者になったからといって、お前に俺を従わせることなどできないぞ。)

食べ盛りの若い磐井や毛野が煮えたぎる米や汁をすすっている姿が想像されます。彼らが共に寝起きた場所は、やはりヤマト政権の周辺だったと考えられます。近江毛野はその氏の名から畿内に近い近江(今の滋賀県)を基盤とする「臣{おみ}」姓をもつ豪族であったと思われる。(死後近江に葬られています。)

九州に基盤をもつ磐井は、ヤマト政権に服属する地方豪族の子弟として大王のもとに送られて青年期を過ごし、父が死んだためにその地位を継承するために九州に戻り、近畿地方の混乱(大王継体の即位など)や半島の情勢を目の当たりにして、しだいに新羅などと結び、独自の野望を強めていったと思われます。

磐井が毛野に投げかけた言葉は、磐井らが青春期を過ごしたヤマト政権を旧王朝、反乱時のヤマト政権が継体に始まる新王朝と認識していたことや、地方豪族が独自の権限で地方支配や外国との外交を行っていたと仮定すれば容易に理解できます。

「おれもお前も前王朝に仕えた身ではないか。九州にいるオレにとって、成立事情が不透明な新王朝に仕えることはできない。何よりもまず、オレたち豪族が地方を支配し、外国と独自に交渉することは、固有の権限ではないのか」ーと。

<整理ノート：5～7世紀初頭>

○5世紀

- ・4世紀末から朝鮮半島に侵入した倭を、5世紀初頭に高句麗の（ 1 ）が撃退した。
- ・「（ 2 ）」とよばれた倭（ヤマト政権）の首長5人が相ついで中国の南朝に使者を派遣した。
最後の「武」は奈良時代に「（ 3 ）天皇」と名づけられる大王として、上表文などで有名。
→彼の名ワカタケルの名を刻んだ金石文として、
埼玉県（ 4 ）古墳出土の鉄剣、熊本県（ 5 ）古墳出土の鉄刀が有名。
- このことから、関東地方から九州北中部にヤマト政権の勢力が及んでいたと考えられている。

○6世紀

- ・6世紀初頭、越前・近江などを基盤とする「（ 6 ）天皇」が即位した。
- ・6世紀前半、九州で（ 7 ）が新羅と結んで反乱を起こした。
- ・仏教公伝—百済の（ 8 ）から倭の「（ 9 ）天皇」へ。
公伝年—『日本書紀』は（ 10 ）年、『上宮聖徳法王帝説』『元興寺縁起』などは
（ 11 ）年としている。
- ・562年：加羅（伽耶 {かや}）が百済・新羅の勢力下に入る。
- ・587年：蘇我馬子が（ 12 ）と戦って滅ぼした。
- ・592年：馬子が「（ 13 ）天皇」を殺害した。
- ・593年：馬子の姪で「敏達天皇」の妃だった「（ 14 ）天皇」が即位した。
- （ 14 ）は628年死去まで35年の長きにわたり倭国を統治した。

1. 好太王、2. 倭の五王、3. 雄略、4. 稻荷山、5. 江田船山、6. 継体
7. 筑紫国造磐井、8. 聖明王、9. 欽明、10. 552、11. 538
12. 物部守屋、13. 崇峻、14. 推古

))))))

♪高校日本史講座☆1361 (2009-10-16)

○●)))))

●○

09年テーマ史：「日本史受験重要事項9 (人物編2)」

((((

人物編2「持統天皇」～7世紀アジアと女性の王～

1. 持統天皇と志斐姫

『万葉集』(巻3)には、次の2つの歌がおさめられています。

「いなといへど強{し}うる志斐{しい}のが強語{しいがたり}、この頃聞か
ずて、朕{われ}恋いにけり」(天皇)

「いなといへど、語れ語れと詔{の}らせこそ志斐いは奏{そう}せ、強語{し
いがたり}とのる(志斐姫{しいのおうな})

天皇は持統天皇(異説もあります)、志斐姫はその側近たちの中の一人と考えられます。

「私がいやだと言っているのに無理に自分から語ってくる志斐姫なのに、最近、こうした強
語{しいがたり}を聞かないので、私は寂しい思っています^^」

「私がいやだと言っているのに天皇様が語れ語れと仰せられたから私は語ったの ですよ。そ
れを強語{しいがたり}だなんて、私は非情に不愉快です^^」

持統天皇が位にあったのは40代半ばから50代前半のこと。姫{おうな}は、ふつうは「老
女」を意味する語句ですが、宮中でキャリアを積んだ女官、あるいは「神語{かながたり} =
神話の伝承を務めた女官とも考えられます。

いつの時代や場所にも、周囲にからかわれたり周囲をなごませたりする人物がいます。志斐
姫もこうした一人だったのでしょう。

2. 持統天皇57年の生涯(645年～702年)

持統天皇は、中大兄皇子(大王天智)と蘇我氏の傍流、蘇我倉山石川麻呂(馬子の孫、蝦
夷の甥、入鹿とは従兄弟)の娘との間に、乙巳{いっし}の変と同じ645年に生まれていま
す。649年、右大臣の祖父・石川麻呂が反逆の疑いで自殺、持統の母もその直後に病死した
とされています。

石川麻呂の反逆については、大王孝徳あるいは中大兄皇子の陰謀説もありますが真相は不明
です。

讚良 {さらら} とよばれた持統は、657年に叔父にあたる大海人皇子 {おおあまのおうじ} の妻となり、5年後に草壁 {くさかべ} 皇子を生みます。

前後して、歴史は孝徳から斉明へ（持統の祖母。皇極大王が再度即位）と移り、百濟滅亡（660年）、斉明死去、白村江の戦い（663年）と展開します。

持統にとって人生の第1の山場は、父・天智の死後、夫とともに移住先の吉野で挙兵して大友皇子（持統の異母弟）を滅ぼして勝利をおさめたときです。（672年、壬申の乱）

大海人は673年に飛鳥（浄御原宮）で即位して天武天皇（天皇号は彼に始まるとする説が現在有力）となり、持統は皇后になります。

第2の山場は、686年に夫・天武が死去した直後。実子・草壁への皇位継承を実現するために大津皇子（父は天武、母は持統の同母姉）を反逆の疑いで処刑。にもかかわらず、3年後に草壁が死去してしまいます。

こうして持統は、孫（草壁の子、のち文武 {もんむ} 天皇）に譲位するまでの10数年間位につきま。689年に飛鳥浄御原令を施行し、690年に庚寅年籍 {こういんねんじゃく} を造らせ、694年に飛鳥の地に藤原京を完成させます。

大宝律令（701年）も文武天皇の時に完成しますが、その編さん事業を主導したのが持統太上天皇 {だいじょうてんのう} でした。完成の翌702年に57歳で死去、遺体は天皇では初の火葬で、夫の墳墓に葬られました。（天武・持統合葬陵 {がっそうりょう}）

3. アジア女王・女帝の7世紀

7世紀の中国・朝鮮・日本（倭）は、女王・女帝が他の時代とくらべて多く出現した時期です。（新羅では善徳女王、真徳女王。唐では中国史上ただ一人の女帝・則天武后 {そくてんぶこう} がそれぞれ登場）

日本では、推古、皇極（斉明）、持統の3人4代で、合計の在位期間は7世紀100年のうち半分をこえます。なかでも、隋から唐、朝鮮3国から統一新羅というアジア激動のなかで律令国家建設を主導した持統天皇は、古代国家の生みの親だといえます。

大宝律令の制定と同時期に唐へ派遣された使者は、国名を「日本」と名のっています。「日本」の国号選定も持統が大きく関わったとされています。「日本」の由来は不明ですが、持統にとっては玄祖父（祖父の祖父）にあたる蘇我馬子の時に派遣された遣隋使（小野妹子）の国書「日出づるところの天子」にみられるように、対外的に「日の昇る国」とする意識があったのではないかと思います。持統が壬申の乱後に没落の危機にあった藤原不比等（近江政権の功臣・藤原鎌足の子）を登用したことは、その後の藤原氏発展の基礎になります。

元号も「大宝」から連続して使用されていることから、こうした国のかたちづくりを考える上で、持統は非常に重要な人物です。

★持統の母（蘇我氏）の系統でみた流れ

蘇我馬子—○—石川麻呂—○—持統—草壁—文武—元正—聖武—孝謙（称徳）

★持統の父（大王天智）の系統でみた流れ

継体－欽明－敏達－○－舒明・皇極（斉明）－天智－持統－草壁－文武・元正－聖武－孝謙（称徳）

<整理ノート：7世紀の流れ>

○7世紀初頭－推古天皇・蘇我馬子・厩戸王らが中央集権づくりを試みた。

- ・603年：（ 1 ）－豪族クラスの個々の序列化をはかった。
- ・604年：（ 2 ）－豪族に官僚としての民衆支配の心構えを示した。
- ・607年：遣隋使を派遣。使者（ 3 ）が隋皇帝（ 4 ）と面会した。

○舒明 {じょめい} 天皇－推古の死後、非蘇我系で大王敏達 {びだつ} の孫が即位した。

- ・630年：初の遣唐使を派遣した。使者は（ 5 ）。
- ・639年：九重の塔をもつ壮大な百済大寺 {くだらだいじ} を建立した。

→大規模な土木工事を伴う寺や都づくりは、その後の舒明王家の課題になった。

→舒明の死後、妃が即位した（皇極）。

- ・643年：皇極・蘇我氏が有力な王位継承者の（ 6 ）を滅ぼした。

○7世紀後半（舒明系王家の興亡）

- ・645年：（ 7 ）の変－蘇我氏が滅び、大王孝徳（皇極の弟）が即位した。

→孝徳の死後、皇極が再度即位した（斉明）。夫（舒明）の意思を受け継いで壮大な都づくり（飛鳥岡本宮）めざしたが、豪族・民衆の反発を招いた。

- ・660年：（ 8 ）滅亡 →その復興支援のため首都機能を九州（筑紫 {つくし} の朝倉宮）へうつしたが、直後の661年に斉明が死去した。

- ・663年：（ 9 ）－敗北した倭は、古代における朝鮮出兵を終了させた。

→数年の空位（661年～668年）を経て中大兄が近江大津宮で即位した。（大王天智）

- ・668年：近江令－発布については疑問視もされている。
- ・670年：初の戸籍（ 10 ）が造籍された。
- ・671年：天智死去 →子の近江政権が（ 11 ）を継承した。
- ・672年：（ 12 ）－大海人（天智の同母弟）が甥の（ 11 ）を滅ぼした。
- ・673年：大海人が飛鳥の（ 13 ）で即位した（天武天皇）。
- ・684年：（ 14 ）を定めた。－豪族の序列を再編した。

→天武の死後、妃 {きさき} が即位した（持統天皇）。

- ・689年：（ 15 ）が施行された。
- ・690年：6年ごとに作成する初の戸籍（ 16 ）が造籍された。
- ・694年：飛鳥に中国式の宮都（ 17 ）が完成した。

※天武・持統の時代に遣唐使は派遣されていない。（17）の造営にあたっては、唐の都長安 {ちょうあん} ではなく、中国古典『周礼 {しゅらい}』が描く伝統的な宮都が参考にされた。

藤原京－唐との国交断絶期に、中国の伝統的な理念を参考に造営。（694年）

平城京－唐との国交回復後に、唐の都・長安を参考に造営。（710年）

- ・701年：（ 18 ）天皇・持統太上天皇のもとで大宝律令が完成した。
- ・702年：持統死去。

1. 冠位十二階、2. 憲法十七條、3. 小野妹子、4. 煬帝 {ようだい}
5. 犬上御田歙 {いぬがみのみたすき}
6. 山背大兄王 {やましのおおえのおう}、7. 乙巳 {いっし}
8. 百濟、9. 白村江 {はくそんこう} の戦い
10. 庚午年籍 {こうごねんじゃく}、11. 大友皇子
12. 壬申の乱、13. 浄御原宮 {きよみはらのみや}
14. 八色 {はっしき・やくさ} の姓 {かばね・せい}
15. 飛鳥浄御原令、16. 庚寅年籍 {こういんねんじゃく}
17. 藤原京、18. 文武 {もんむ}

))))))

♪高校日本史講座☆1362 (2009-10-21)

○●)))))

●○

09年テーマ史：「日本史受験重要事項10 (人物編3)」

((((

人物編3「藤原仲麻呂」～錯綜の人生と奈良朝～

1. 藤原仲麻呂の位置

今号で8世紀を代表する人物に藤原仲麻呂(706生～764没)を取りあげた理由は、彼が奈良時代の政治を主導した人物であること、60年に満たない人生でありながら多彩なジャンルの人物と「同じ時代」の空気を吸った人物と判断したことによります。

藤原不比等の孫(長男・武智麻呂の次男)として生まれた仲麻呂は、幼少時に彼が14歳の時に死去する祖父・不比等の薫陶{くんとう}を受け、晩年には天智天皇のひ孫でありながら皇位継承からは遠く離れ、律令官人としての人生を踏み出そうとしていた当時20代の山部王{やまべのおう}=後の桓武天皇がおりました。

(全盛期の仲麻呂と、およそ30歳年下の後の桓武天皇が、平城京の宮都あるいは京内ですれ違うことがあったかも知れません。)

奈良時代は政争が相ついで時代でした。これらの政争は、律令国家の成立(701年の大宝律令で一応完成)により、権力の源泉である天皇に近い地位を得ることがより強固な権力・財産を得ることができたからにはほかなりません。

今号では、藤原仲麻呂の生涯を素材に、奈良時代の整理をしたいと思います。

2. 藤原仲麻呂の生涯概観 <整理ノート形式で>

○誕生までー仲麻呂が生まれたのは、平城遷都以前の飛鳥(藤原京)。

- ・701年：(1)完成ー(2)天皇、(3)太上天皇のもとで、刑部{おさかべ}親王や藤原鎌足の子(4)らが編さんした。
- ・701年：(4)の娘宮子{みやこ}が(2)の子<後の聖武天皇>を生んだ。
- ・701年：(4)の後妻・橘美千代が後に聖武の妃となる(5)を生んだ。
※美千代は前夫(皇族)の子・橘諸兄{たちばなのもろえ}を生んでいた。
- ・706年：不比等の長男・武智麻呂{むちまろ}の次男として仲麻呂が誕生した。

1. 大宝律令、2. 文武、3. 持統、4. 藤原不比等、5. 光明子

○青年期－唐風文化を愛好した長屋王は青年期の仲麻呂に大きな影響を与えた。

707年：(2) 天皇死去。→その母(6) 天皇<天智天皇の娘>が即位。

708年：飛鳥(藤原京)から奈良(平城京)への遷都が宣言された。

708年：和同開珎{わどうかいほう・わどうかいちん}が鑄造された。

710年：平城遷都が断行された。

712年：(7) が完成した－建国に関する伝承がまとめられた。

715年：(6) 天皇が娘の(8) 天皇に位を譲った。

718年：(4) が(9) を完成させた。(施行は757年)

720年：(10) が完成した－六国史の最初に位置づけられている。

720年：右大臣で首相格の(4) <仲麻呂の祖父>が死去した(61歳)。

→天武天皇の孫(11) が、首相格として政界を主導した。

(724年、左大臣に昇進)

→722年：(12) －耕地の拡大をはかった。

→723年：(13) －公地公民制の見直しをはかった。

724年：(8) 天皇が甥(兄・文武天皇の子)の聖武天皇に譲位した。

729年：(11) が、藤原不比等の子ら(藤原4子)の陰謀で自殺した。

→4子は妹の聖武天皇妃の(5) <仲麻呂の叔母>を皇后に立てた。

※ 藤原不比等の4人の子(藤原4子体制)

(14) 家－不比等の長男武智麻呂に始まる。仲麻呂の父。

(15) 家－不比等の2男(16) に始まる。→平安以降の嫡流。

(17) 家－不比等の3男宇合{うまかい}に始まる。

(18) 家－不比等の4男麻呂に始まる。

734年：仲麻呂、従五位下となる。首相格の父・武智麻呂の抜擢による。

6. 元明、7. 古事記、8. 元正、9. 養老律令、10. 日本書紀

11. 長屋王、12. 百万町歩の開墾計画、13. 三世一身法、14. 南

15. 北、16. 藤原房前{ふささき}、17. 式、18. 京

○政争の激化－律令体制の中で、仲麻呂はその正統的な後継者として成長した。

・737年：伝染病(天然痘)の流行により、藤原4子が相ついで死去した。

→皇族の(19) <(5)の異父兄>が首相格として政界を主導するようになった。

(745年、左大臣に昇進)

※ 唐から帰国した(20) <地方豪族の吉備氏出身>が登用された。

- ・740年：(21) <仲麻呂のいとこ、式家>が左遷先の九州・大宰府で反乱、敗死した。
- 聖武天皇は、恭仁 {くに}、紫香楽 {しがらき}、難波 {なにわ} に宮都 {きゅうと} をうつした末、745年に平城京へ還都 {げんと} した。
- ・741年：(22) の詔 {みことのり}、発令。
- ・743年：(23) の詔、発令。「天下の富を有 {たも・も} つ者は朕 {ちん・われ} なり。天下の勢 {いきおい} を有つ者も朕なり。」
- ・743年：(24) - (13) を修正した。(莊園史の始まり)
- ・749年：聖武天皇が病気を理由に娘の (25) 天皇<仲麻呂の従妹>に譲位した。(男性天皇の生前譲位としては初めての例。)
- ・752年：(26) 寺で大仏開眼の供養会 {くようえ} が举行された。
- この頃から藤原仲麻呂が政界での発言力を増した。
- ・754年：仲麻呂、唐から来日した僧 (27) を厚遇。以後親交を深めた。
- ・755年：大陸 (唐) で安祿山 {あんろくざん} が反乱を起こした。
- 仲麻呂は、朝鮮の統一国家 (28) への侵攻政策を計画した。
- ・757年：仲麻呂、祖父が718年に編さんした (9) を施行した。
- ※ 718年制定の養老律令が39年後の757年に施行されたことは、養老律令と大宝律令との間に大きな差異がないこと、制定や施行の理由が藤原不比等や仲麻呂の「権威づけ」によるものとされています。
- ※ 新羅侵攻計画については、政府が諸国に命令を下して軍船を造ったり兵の徴発を行ったりしていることから、律令国家として充実しつつあったことを示すものとされています。100年前の百濟支援戦争 (白村江の敗戦に帰結) で、大王齊明らが九州に出向いて西日本各地の豪族の協力を得たことと比べると隔世 {かくせい} の感があります。

- 19. 橘諸兄、20. 吉備真備 {きびのみまきび}、21. 藤原広嗣
- 22. 国分寺建立、23. 大仏造立、24. 墾田永年私財法
- 25. 孝謙、26. 東大、27. 鑑真、28. 新羅

○栄光と没落－仲麻呂は、祖父から自分が継承した律令体制によって滅亡した。

- 757年：(19) の子 (29) が反乱の疑いで逮捕され、獄死した。
- 758年：(25) 天皇が、仲麻呂の支援した皇族 (30) 天皇に譲位した。
- 仲麻呂、官職・役所の名称等の唐風化を推進した。
- 760年：仲麻呂が、皇族以外では初めて太政大臣の地位についた。
- 760年：金貨の開基勝宝、銀貨の太平元宝、銅貨の万年通宝を鑄造した。
- 760年：叔母の (5) が死去した。→仲麻呂は重要な支援者を失った。
- 762年：(25) 太上天皇の僧 (31) に対する寵愛をめぐり、(30) 天皇と (25) 太上天皇が対立を深めた。
- 764年：仲麻呂、自らへの権力を強固にするため、挙兵したが敗北して近江で一族とともに斬首された。

→ (25) 太上天皇が (32) 天皇として再度即位した。

- ※ 現在の「文部科学省」の「文部」(明治初期の文部省にはじまる)は、式部省 {しきぶしょう} の名を仲麻呂が唐風に「文部省 {ぶんぶしょう}」に改めたことが語源とされます。
- ※ 仲麻呂の唐風化政策は、次世紀の嵯峨朝に継承されることとなります。
- ※ 仲麻呂の乱で、孝謙太上天皇側で仲麻呂鎮圧を指揮したのが、吉備真備でした。政府の仲麻呂鎮圧は律令の軍事制度にもとづくもので、仲麻呂は、祖父がつくった律令制(軍事体制)に鎮圧されたといえます。

29. 橘奈良麻呂、30. 淳仁 {じゅんにん}、31. 道鏡、32. 称徳

))))))

♪高校日本史講座☆1363 (2009-10-26)

○●)))))

●○

09年テーマ史：「日本史受験重要事項12 (人物編4)」

((((

人物編4「菅原道真」～唐風文化を背負った人生～

1. 菅原道真－学問の家の継承者

菅原氏は、8世紀まで土師{はじ}氏を名のり古墳築造・葬送儀礼に携わる氏族でしたが、781年に桓武天皇が即位した時に改姓を願ひ出ます。

桓武天皇の母・高野新笠{たかののにいがさ、渡来系氏族出身}の母、つまり祖母が土師真妹{まいも}という縁もあり、この願ひ出は許され、土師氏は菅原・大枝(のち大江)・秋篠などの姓に改めます。(正式には菅原宿禰{すがわらのすくね}のち菅原朝臣{すがわらのあそみ・あそん})

最初に菅原を名のった古人{ふるひと}は学者官僚として活躍し、文章博士{もんじょうはかせ}・大学頭{だいがくのかみ}を歴任します。

古人は道真の曾祖父に当たる人物です。古人－清公－是善と続き、是善は文章博士などのほか国司も歴任し、邸内に開設した私学校は、のちに「菅家廊下{かんけろうか}」などとよばれ道真にも引き継がれ、多くの官僚や学者を生んでいます。

菅原道真(745-903)は、中国の科挙{かきょ}を模倣した試験＝方略試{ほうりやくし}を25歳の時に「中の上」で合格し、兵部少輔{ひょうぶのしょう・ひょうぶのしょうゆう}などの行政官職や文章博士についています。

科挙は中国で6世紀末の隋から20世紀初頭の清まで高級官僚を登用するための試験として行われましたが、日本では平安時代に導入されたものの、古代豪族の子孫である律令貴族による特権、すなわち父や祖父の地位によって自分の出発する位階が決まる蔭位{おんい}の制などによりしだいに機能しなくなりました。

901年に道真が中央政界を追放されたこと(大宰府へ左遷)は、その後藤原氏が政権を安定させていくことを思えば、日本で科挙が根づかなかつたことを考える上で重要な事件だったと私は思います。

2. 官僚政治家・道真

道真が方略試に合格した870年は、その4年前（866年）の応天門の変を経て正式に摂政の地位を得た藤原良房の晩年にあたります（872年死去）。

時代は清和天皇の死去、その子・陽成 {ようぜい} 天皇の時代へとうつり、多くの問題を引き起こしたため陽成天皇は廃され、884年に藤原氏を外戚としない光孝天皇が即位します。

この時に藤原基経 {もとつね} が事実上の関白に就任しますが、2年後に道真は讃岐守 {さぬきのかみ} として地方行政を経験することになりました。886年から890年のことです。

道真が讃岐守時代につくった漢詩に「寒早十首 {かんそうじっしゅ}」があります。「何 {いづ} れの人にか寒気早き」（冬を迎え、誰に早く寒さが訪れるのだろうか）で始まる10首の漢詩で、逃亡先から戻った人、妻に先立たれた老人、早くに両親を亡くした人、薬草園で働く人、駅亭で働く人、雇われて船を出す人、魚を釣る人、塩を売る人、樵 {たきぎ} を採る人などを詠んでいます。

一首（第4首）を紹介します。

何人寒気早	何 {いづ} れの人にか寒気早き
寒早夙孤人	寒は早し、夙 {つと} に孤 {こ} なる人
父母空聞耳	父母、空 {むな} しく耳に聞く
調庸未免身	調庸 {ちょうよう} 免 {まぬか} れざる身
葛衣冬服薄	葛衣 {かつい} 冬服薄く
疏食日資貧	疏食 {そし} 日資 {につし} 貧し
每被風霜苦	風霜に苦しめらるる毎 {ごと} に
思親夜夢頻	親を思ひ、夜に夢みる事頻 {しき} りなり

誰に早く寒さが訪れるのだろうか。早くに親を亡くした人もそうだろう。父母がいたことは他人から聞いて知っているだけである。重い税の調・庸からは逃れられない。葛 {くず} でつくった夏用の粗末の服は冬服としては薄い。日々の食事も十分ではない。寒風や霜に身を震えさせては、亡き親を思い、夢を見ているのだろう。

この間に都の中央政界で起きたのが、887年から888年の阿衡の紛議 {あこうのふんぎ} で、新たに即位した宇多天皇に対して基経が半年以上にわたって仕事を放棄したという事件です。宇多天皇が基経に関白を権威づけるため「阿衡」の語を用いた詔書を発したため、基経はこれを権限の無い荣誉職とみなしたためです。

この事件は宇多天皇が折れることで決着しましたが、道真は書状で基経をなだめています。

基経が891年に死去すると、宇多天皇は摂政・関白いずれも置かず、道真を重用します。遣唐大使に任命された道真が遣唐使派遣の中止を建白したことは、唐が907年に滅亡したため、結果的に「遣唐使廃止の建白」になりました。

3. 道真の没落

897年。わずか30歳で宇多天皇は子の醍醐天皇に位を譲り仁和寺{にんなじ}に入って法皇になります。譲位の理由については不明で、仏教に専念するためという説や、藤原氏の政治的な圧力から逃れるためという説などがあります。

醍醐天皇のもと、道真は右大臣、藤原時平は左大臣に進みます。

そして、901年、道真は、醍醐を廃して斉世{しんのう}親王(宇多の第3皇子、妻が道真の娘)の即位を企てたとして、大宰権帥{だざいのごんのそち}に左遷され、2年後に任地の大宰府で死去します。

道真追放の真の理由は、学者でありながら右大臣にまで進み、皇族とも姻戚関係をもつにいたった点が周囲の反感を買ったことにあると考えられています。

なかでも2歳年下で当時文章博士でもあった三善清行{みよしのきよゆき}は、道真に「家柄(止足{しそく}の分)を自覚し、右大臣を辞任しなさい」と勧告するほどでした。

清行は、914年に「意見封事{いけんふうじ}十二箇条」を醍醐天皇に提出し、地方政治の衰退を指摘したことで知られます。

唐風文化の正統的な継承者でもあった道真が政界を追放されたことは、前に述べた日本での唐式の科擧を模倣した官吏登用の衰退とともに、唐風文化から国風文化(藤原文化)への移り変わりを象徴する出来事にもなりました。905年には「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」の序をもつ初の勅撰和歌集『古今和歌集』が編さんされています。

しばしば道真の遣唐使廃止が国風文化の基礎になったといわれていますが、これは正しくはなく、むしろ道真が政界から追放されたことの方が重要だと思われま

<整理ノート・8世紀末期～10世紀初頭の流れ>

- ・770年：古代最後の女帝となる(1)天皇が死去。のち道鏡を左遷。
- 天智天皇の孫(2)天皇が即位した。
- ・781年：(3)天皇が即位した。
- ・810年：(4)太上天皇が復位をはかるが(5)天皇側が阻止。
- この時、藤原冬嗣が(6)に任命され、北家繁栄の地歩を築いた。
- ・842年：(7)の変→橘逸勢{たちばなのはやなり}らが流罪。
- ・858年：(8)天皇が即位し、外祖父(9)が事実上の摂政に就任。
- ・866年：(10)の変。→伴善男{とものよしお}らが流罪。
- (9)が正式に摂政に就任した。
- ・884年：陽成天皇が廃され、(11)天皇が即位。(12)が事実上の関白に就任。
- ・887年：(13)天皇が即位した。(12)を正式に関白に任命したが、(14)を招いた。(888年、正式に就任)
- ・891年：(12)死去。学者の(15)が重用された。
- ・894年：(15)、遣唐使の中止(廃止)を建白。
- ・901年：右大臣(15)が大宰権帥に左遷された。
- ・909年：首相格の左大臣(16)が死去した。
- (17)天皇による「延喜の治{えんぎのち}」の時代へ。

1. 称徳、2. 光仁、3. 桓武、4. 平城、5. 嵯峨
6. 蔵人頭 {くろうどのとう}、7. 承和 {じょうわ}、8. 清和
9. 藤原良房、10. 応天門、11. 光孝、12. 藤原基経、13. 宇多
14. 阿衡の紛議、15. 菅原道真、16. 藤原時平、17. 醍醐

))))))

♪高校日本史講座☆1364 (2009-11-03)

○●)))))

●○

09年テーマ史：「日本史受験重要事項（人物編5）」

((((

人物編5「源信 {げんしん}」～浄土信仰のデータベースづくり～

0. 10世紀の世界と日本

10世紀は、世界各地で古い体制が崩れ、新たな体制が生まれた時期です。

ヨーロッパ世界では、ビザンツ（東ローマ）帝国が黄金時代を謳歌 {おうか} したことを除き、西ヨーロッパではカロリング朝の東西フランク王国が断絶し、神聖ローマ帝国（のちのドイツ）やフランスが成立します。イスラム世界では3つの王朝が分立し、11世紀にセルジューク朝トルコが成立します。

アジア世界では、中国で唐が滅亡し、五代十国の分裂を経て宋が成立します。

この変動は周辺諸国にも影響を与え、新羅から高麗へ、渤海から契丹へ。雲南地方にはタイ系の大理国 {だいにりこく} が成立します。

日本でも、10世紀前半に承平・天慶の乱（将門の乱、純友の乱）が起こり、これを鎮圧した武士の首長たちは、桓武平氏、清和源氏の地歩を築くこととなります。

唐の滅亡→周辺民族の自立（日本では国風文化へ）

1. 源信 {げんしん}

承平・天慶の乱と同時期、近く来ると信じられていた「末法 {まっぽう}」の世に向けて、仏教のあり方を模索した空也 {くうや・こうや} が市中で念仏を説いています。

こうした浄土信仰（浄土教）を、インドや中国の高僧の著書を研究し、『往生要集 {おうじょうようしゅう}』を著して人々（特に貴族層）に浄土信仰をわかりやすく説いた天台僧が、源信 {げんしん、942-1017} です。

歴史的にみれば、源信は、仏教（特に彼が所属した天台宗）の中で最も重要で根本的な経典である法華経から出発して浄土信仰を研究し、地獄や極楽の世界観を生み、阿弥陀信仰や死の迎え方などを整理・体系化した人物といえます。

現代で言えば、各種のデータを取り込んでデータベースをつくる行為にも似ています。

『往生要集』は、日本史学習（受験）でも有名な次の語を序文に掲げています。

「それ往生極樂の教行 {きょうぎょう} は、濁世 {じょくせ} 末代の目足 {もくそく} なり。道俗貴賤 {どうぞくきせん}、誰 {たれ} か帰せざる者あらん。」

→末世を迎える今にあつて、極樂往生の教行（教えを学び、実践すること）は、僧か一般人かを問わず、また身分が貴いか賤しいかを問わず、全ての人にとって救いの道である。

源信は、この世（現世 {げんぜい}）をけがれた地（不浄の地）＝穢土 {えど} とみなし、阿弥陀仏の救いを受けるため念仏に専念して極樂へ行く（往生）ことを説きます。これを「厭離穢土 {おんりえど}、欣求浄土（ごんぐじょうど）」といいます。

2. 学者としての生涯

源信は、祭祀を担当する卜部 {うらべ} 氏（4世紀後に吉田兼好を輩出）の家に生まれ、10代前半で比叡山の延暦寺に入り、その後様々な教学を修め、すでに30代前半で学問興隆の指導者として期待されていました。

40代前半のとき、わずか半年足らずで『往生要集』を書き上げています。

また、源信のその後30年にわたる行動は、実に精力的なものでした。

自分の著書（『往生要集』）を中国（宋）に渡る（戻る）中国人商人に託してその評価を求め、あるいは数々の書を著して藤原道長など貴族層に浄土信仰を広めています。

源信の僧侶としての地位は63歳（1004年）で権少僧都 {ごんのしょうそうず} に任じられたのが最高位で、翌年には辞退しています。このことについては、若き日の源信に母がさとした言葉（和歌）「後の世を渡す橋とぞ思ひしに世渡る僧となるぞ悲しき まことの求道者となり給へ」を守ったためとされます。

1017年6月10日。病身の源信は、いつものように朝食をとり、阿弥陀仏の手に結び付けられた糸を持ち、念仏を唱えます。そして眠るように76歳で死去しました。

俗世の地位に執着せず、学問上多くの功績を残した源信の生涯には心打たれるものがあります。

3. 源信が与えた影響

源信が述べた現世（穢土）、来世（浄土・極樂、地獄）などの世界観は、その後の絵画に影響を与え、平安時代の来迎図 {らいごうず} や鎌倉時代の地獄草紙 {じごくぞうし}・餓鬼草紙 {がきぞうし} などを生みます。

また、古代末期の文学（『今昔物語集』）や中世の文学（鴨長明『方丈記』など）にも影響を与えています。源信は『源氏物語』で死を決意した浮舟（うきぶね）を助ける「横川の僧都（よかわのそうず）」のモデルとされています。

源信は、かつて最澄が南都側の反論を招いた、「全ての人びとはみな、仏になることができる」という教え（一切衆生皆成仏道（いっさいしゅじょうかいぶつどう））を著書で定着させることに成功しています。この人間平等に立脚した教えは、浄土系の仏教宗派の開祖の法然（ほうねん）・親鸞（しんらん）・一遍だけでなく法華宗の開祖の日蓮にも影響を与えています。

親鸞は自ら尊敬する「7高僧」の一人として源信を位置づけています。

※ 7高僧

龍樹（りゅうじゅ）－2～3世紀、インド僧ナーガールジュナ

天親（てんじん）＝世親（せしん）－4世紀ころ、インド僧ヴァスバンドゥ

曇鸞（どんらん）－5～6世紀、中国（北朝）僧

道綽（どうしゃく）－6～7世紀、中国僧

善導（ぜんどう）－7世紀、中国僧

源信（げんしん）－10～11世紀、日本僧

、源空（げんくう）＝法然（ほうねん）－11～12世紀、日本僧

※ 親鸞の名の変遷

親鸞は、最初は綽空（しゃくくう）、ついで善信（ぜんしん）を名のっています。この変遷について、宗教学者の山折哲雄氏は、綽空は中国僧・日本僧各1字（道綽・源空）、善信も同様（善導・源信）、しかし「親鸞」はインド僧・中国僧（天親・曇鸞）と、日本僧から脱却することで、自ら日本を代表する僧侶として自己を位置づけているとしています。

この説をとるならば、親鸞が「善信」が名のった時期は、源信を師の法然と同じかそれ以上に位置づけていたと考えられます。

<整理ノート・浄土信仰の広がり>

・10世紀前半：「市聖（いちのひじり）」とよばれた（1）が京などで念仏を広めた。

・985年：天台僧の（2）が（3）を著した。

同じ頃、慶滋保胤（よししげのやすたね）が（4）を著した。

→浄土信仰に基づく寺院が建立された。

○藤原道長が（5）を建立した。

○藤原頼通が宇治に（6）を建立した。阿弥陀如来像は（7）造によるもので、仏師（8）による。

→臨終の時に阿弥陀仏が迎えに来臨（らいりん）する様子を描いた絵画を（9）という。

・平安時代末期：地方武士などの台頭（たいとう）や「聖」とよばれた人々の布教活動により、地方各地に浄土信仰が広まった。

→浄土信仰に基づく寺院

○奥州藤原氏－（10）寺、無量光院、毛越寺（もうつうじ）など。

○今の福島県いわき市ー（ 11 ）など。

○今の大分県豊後高田市ー（ 12 ）

1. 空也、2. 源信、3. 往生要集、4. 日本往生極楽記
5. 法成寺 {ほうじょうじ}、6. 平等院鳳凰堂、7. 寄木、
8. 定朝 {じょうちょう}、9. 来迎図 {らいごうず}、10. 中尊寺
11. 白水阿弥陀堂、12. 富貴寺大堂

※ しばしば白水阿弥陀堂と富貴寺大堂を迷うことがあると思いますが、前者は奥州藤原氏(藤原清衡)の娘を妻とする豪族が平泉の「泉」を分けて「白水 {しらみず}」と名づけたことに由来します。

))))))

♪高校日本史講座☆1364 (2009-11-07)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編6<11世紀>源頼義）

((((

人物編6「源頼義 {みなもとのよりよし}」～沈毅にして武略多し～

0. 清和源氏の発展

●経基王（源経基）

清和源氏は、清和天皇の子孫で武人貴族として発展した一族です。

はじめて源姓を名のったのは清和天皇の孫・経基王 {つねもとおう} で、961年のことでした。すでに彼は承平・天慶 {じょうへい・てんぎょう} の乱で活躍し、特に藤原純友 {すみとも} を討った功績で昇進し、内昇殿 {ないしょうでん} を許されます。

●満仲 {みつなか} - 頼信 {よりのぶ}

源経基の子・満仲 {みつなか} は、摂津 {せつづ} 国の多田を拠点に、越前、武蔵、摂津、常陸の国司 (守・かみ) を歴任します。

彼は安和の変 {あんなのへん} で活躍し、摂関家とも結びつきを深めます。

さらにその子の頼光 {よりみつ}・頼信 {よりのぶ} 兄弟は、若い頃から天皇や摂関家に出仕して、宮廷世界とも密接に関わります。

頼光は藤原道長が邸宅を新築したとき、その造営に私財をなげうち、華美なつくりやきらびやかな品々で人びとを驚かせています。こうした努力がむくわれて、頼光は備前・但馬・美濃などの国司 (守) を歴任します。

成功 {じょうごう} や重任 {ちょうにん} の典型例だといえます。

頼光の弟・頼信は、源氏の東国進出に大きな役割を果たします。

1028年、桓武平氏の平忠常 {ただつね} が下総・上総・安房一帯を3年間にわたって占拠するという、「忠常の乱」がおきます。

これを鎮圧した頼信は、美濃、石見、伊勢、常陸、河内の国司 (守) に加えて陸奥国の反乱を鎮圧する最高司令官の鎮守府将軍 {ちんじゅふしょうぐん} に任命されます。

2 大武士団 (清和源氏・桓武平氏) の発展

(1) 2大武士団の首長である棟梁 {とうりょう} は、天皇の子孫としての「貴種」として、

中央政界や地方行政で活躍した。

(2) 特に10世紀の王朝国家を揺るがせた承平・天慶の乱を鎮圧した源経基や平貞盛 {たいらのさだもり} らの子孫は中央政界でも優遇された。

(3) 源平両氏とも、律令国家を基本的に引き継いだ王朝国家（天皇の外戚である藤原氏北家＝摂関家が国政を主導）や、院政（天皇家の家父長である上皇が「治天の君 {ちてんのきみ}」として国政を主導）との結びつきを強めて勢力を拡大した。

1. 頼義 {よりよし}

頼信の子が、頼義 {よりよし、988-1075} です。

『陸奥話記 {むつわき}』には、「性沈毅にして武略多く、最も将帥 {しょうすい} の器 {うつわ} たり」「射芸 {しゃげい}」の名手と記されています。

頼義も朝廷に出仕して相模、武蔵、下野の国司（守）を歴任し、東国の豪族や開発領主（武士）との関係を深めます。

1051年、陸奥 {むつ} 6郡の支配者で「東夷 {とうい} の酋長 {しゅうちょう}」といわれた安倍頼良（のち頼時）が反乱を起こしたとき、頼義は陸奥守 {むつのかみ} に任じられます。

そして、頼義は子・義家（よしいえ、1039-1106）とともに東国武士団を率いて、安倍貞任 {さだとう}・藤原経清 {つねきよ} らを討って都に凱旋 {がいせん} します。（前九年合戦：1051-1062）

『陸奥話記』が記す安部氏の滅亡の様子は、合戦で敗者やその妻子・一族等がこうむる理不尽について、リアリティを伴って今日に伝えています。

『陸奥話記』安倍氏の滅亡（1062年9月17日）-----

（源頼義は、かつての家来で安倍頼時の娘婿として頼義を裏切って安倍氏に味方した藤原経清を生け捕り）「鈍刀を以てその首を漸斬す。これ経清が痛苦久しくせんと欲してなり。」

「貞任劔 {つるぎ} を抜いて官軍（頼義軍）を斬る。官軍鋒 {ほこ} を以てこれ（貞任）を刺し、大楯に載せ六人にてこれを舁 {か} き、將軍（頼義）の前に置く。その長（身長）六尺有余（約180センチ余）、腰圍 {こしまわ} り七尺四寸、容貌魁偉 {ようぼうかいい}、皮膚肥白 {ひふひはく} なり。將軍罪を責め、貞任一面に死す。また弟重任 {しげとう} を斬る。

・・・貞任の子童 {こわらわ} 十三歳、名を千世童子 {ちよどうじ} という。容貌美麗 {びれい}、甲 {かぶと} を被 {かぶ} り柵外 {さくがい} に出て、能 {よく} 戦い驍勇祖風 {ぎょうゆうそふう} あり。將軍哀憐 {あいりん} し、これを宥 {なだ} めんと欲す。（清原）武則進んでいわく、小義を思い巨害 {こがい} を忘るなかれと。將軍領 {うなづ} き遂に斬る。

城中の美女数十人、皆綾羅 {りょうら} を衣 {まと} い、ことごとく金翠 {きんすい} を粧 {よそお} い、烟 {けむり} に交わり悲泣す。これを出て各々 {おのおの} 軍士 {いくさびと}

に賜 {たまわ} る。但し柵 {さく} 破るるの時、則任 {のりとう} の妻独 {ひと} り三歳の男を抱き、夫に語っていわく、君没し将 {い} るに、妾独り生くるを得ず。請いて君前に先に死すと。すなわち児を抱きながら自ら深淵 {しんえん} に投じて死す。一烈女というべきか。」

『陸奥話記』は11世紀後半に成立したとされ、内容が詳細なことから、前九年合戦の報告書をもとに、政府の役人に近い人物が書いたと考えられています。

源頼義の側に立って記述されていますが、安倍氏側の惨状も記載することで弱者・敗者が受ける過酷な運命を後世に伝えたといえます。

○清和源氏系図

頼義－義家－源氏嫡流、足利氏、新田氏

└ 義綱

└ 義光－平賀氏、武田氏、佐竹氏、小笠原氏、南部氏

2. 義家以後

頼義の子・義家は、中央官職や河内、相模、武蔵、信濃、出羽、下野、伊予、陸奥の国司(守)を歴任し、前九年合戦での華々しい活躍により、世に「天下第一武勇 {ぶゆう} の士」、「武威 {ぶい} 天下に満 {み} つ、誠にこれ大將軍にたる者なり」とまでいわれます。

1083年、出羽国で清原一族の内紛 {ないふん} が起きます。

後三年合戦(1083－87)です。これに義家は介入し、清原清衡 {きよひら。藤原経清の実子。母は前九年合戦後、安倍氏や父を滅ぼした清原武則の子・武貞 {たけさだ} と再婚} をたすけて、清原武衡 {たけひら}・家衡 {いえひら＝清衡の異父弟} らを滅ぼします。

清原武則－武貞－家衡 (母は安倍頼時の娘)

藤原経清－清衡 (母は安倍頼時の娘) ←源義家が支援

後三年合戦を政府は私闘とみなしたため義家は私財をなげうって恩賞を東国武士に与えることになりましたが、このことは義家(清和源氏)と東国武士との主従関係をかえって深めることになり、のちの鎌倉幕府成立の際に多くの東国武士が頼朝に参集する素地になりました。

義家の影響を排除した陸奥では、その後、父・経清の藤原姓を名のった清衡(藤原清衡、1056－1128)が、その後100年に及ぶ奥州藤原氏4代の支配を確立します。

●藤原清衡－基衡 {もとひら}－秀衡－泰衡

源義家の晩年は不遇で、嫡子で対馬 {つしま} 守の義親 {よしちか} が大宰府に反乱を起こすなか、1106年に死去します。義親は2年後に平正盛に出雲で討たれ、京で梟首 {きょうしゅ} (首を木などにくりつけて人々にさらすこと) されました。

義親の子が為義 {ためよし} で、義親滅亡時は11歳でした。

為義が歴史の表面に出てくるのは、それから50年後の1156年、鳥羽法皇 {とばほうおう} の死を契機に京都で起きた保元 {ほうげん} の乱です。このとき、子の源義朝 (33歳) や平清盛 {たいらのきよもり} の源平2大武士団の嫡流は、ともに後白河天皇方に味方して勝利をおさめます。

その一方で、清盛の叔父忠正 {ただまさ} や義朝の父為義 {ためよし、60歳} ら崇徳 {すどく} 上皇方の武将はとらわれて処刑されました。保元の乱により、源義朝は昇殿 {しょうでん} を許され、それまでの下野 {しもつけ} 守に加えて左馬頭 {さまのかみ} になります。しかし、後白河上皇の近臣、すなわち藤原通憲 (みちのり=信西 {しんぜい}) と藤原信頼 {のぶより} との対立、清盛と義朝との対立がそれぞれ深まり、1159年に平治 {へいじ} の乱が起こります。敗れた義朝は逃れた先の尾張で家来に謀殺され、時代は平氏全盛へと向かいます。義朝の遺児で平治の乱に出陣 (初陣) した13歳の頼朝 {よりとも} は伊豆に流罪となりました。

< 整理ノート：清和源氏の栄光・没落 >

- 経基－承平・天慶の乱。瀬戸内海で海賊を率いた (1) を討った。
- 満仲－969年：(2) で藤原氏に協力。
- 頼信－11世紀前半に房総半島で起きた (3) の反乱を鎮圧した。
- 頼義－1051年に東北地方で起きた (4) を鎮圧。
- 義家－1083年に東北地方で起きた (5) を鎮圧。
- 義親－西日本各地で反乱を起こして討たれた。
- 為義－1156年、(6) の乱で敗れ、斬首。
- 義朝－1159年、(7) の乱で敗死。

1. 藤原純友、2. 安和の変、3. 平忠常、4. 前九年合戦
5. 後三年合戦、6. 保元、7. 平治

))))))

♪高校日本史講座☆1366 (2009-11-09)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編7<12世紀>後白河法皇）

((((

人物編7「後白河法皇」～比類なき暗主～

1. 誕生から即位まで

後白河（1127～1192）は、鳥羽上皇（法皇）の第4皇子として生まれ、雅仁（まさひと）と名づけられます。母は待賢門院（たいけんもんいん）と称された藤原璋子（しょうし・たまこ）です。当時は曾祖父の白河法皇による院政の最末期（白河は1129年死去）で、後白河が生まれた時、8歳年上の同母兄の崇徳（すとく）天皇がすでに4年前に4歳で即位していました。

崇徳の実父は白河（鳥羽の祖父）と噂され、白河の鳥羽に対する冷遇（崇徳への偏愛）、鳥羽の崇徳に対する冷遇は、のちの保元の乱（1156年）の伏線になったとされます。

●後三条—白河—堀河—鳥羽—崇徳・後白河

白河の死後、「治天（ちてん）の君」（天皇家の家長）として院政の主宰者となった鳥羽は、1142年に崇徳を退位させ、寵愛する美福門院（びふくもんいん）との間に生まれた近衛（このえ）天皇（2歳）を即位させます。しかし、1155年、近衛天皇は16歳で死去してしまいます。

その後継候補には、母を美福門院とする八条院（はちじょういん）（八条院領の領主として日本史学習でも重要人物）、崇徳の子・重仁（しげひと）、雅仁（後白河）の子・守仁（もりひと）らの名があがりますが、けっきょく、守仁（のちの二条天皇）までの中継ぎのかたちで雅仁自身が即位することになりました。

後白河（雅仁）28歳のときです。

雅仁には「お遊びなどありとて、即位の器量にはあらず（『愚管抄』）」という評判があり、崇徳も「文にもあらず、武にもあらず（『保元物語』）」と述べ、側近の藤原信西（しんぜい。通憲）も後年に「和漢の間に比類（ひるい）なきの暗主（あんしゅ）なり（九条兼実『玉葉』）」と評するほどの人物でした。簡単にいうと、誰もが雅仁を天皇にふさわしい人物とは思っていませんでした。遊んでばかりいて支配者としての能力の無い人物と思われていたのです。

雅仁の幼少期から青年期は、兄の崇徳天皇や異母弟（近衛天皇）が皇位についた時期にあたり、崇徳にも皇子（重仁）が生まれていたもので、自分自身に皇位がまわってくることは思いもよらないことでした。

このため、青年期の雅仁は今様 {いまよう} に熱中します。今様は当時の流行歌謡をさし、その語には今風・現代風という意味がありました。

雅仁が編さんした『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）口伝集 {くでんしゅう}』には、「（後白河＝雅仁は）十余歳のときより、今にいたるまで、今様を好みて怠 {おこた} ることなし」、「春夏秋冬、四季につけて折を嫌うことなく、ひねもす謡 {うた} い暮らし、夜もすがら唄 {うた} 明かさぬ」日はなかったと記されています。

雅仁は若い頃から傀儡子 {くぐつ、人形遣いの被差別民} や遊女などを宮中に招いて今様を教してもらい、毎晩のようにうたってばかりいたのです。賤視 {せんし} された人びとの文化に目を向け、それを公家文化に取り入れた雅仁すなわち後白河は、それまでの天皇とはことなる「新たな帝王」だともいえます。

のちに平清盛のまねきに応じて福原の山荘を訪れたときに宋人と対面したのも、人間をわけへだてなく見つめる精神が後白河にあったからかもしれません。（貴族の藤原<九条>兼実は、後白河が外国人と対面したことについて「我が朝廷喜以来未曾有 {みぞう} の事なり。天魔 {てんま} の所為 {しよい}」と批判）

※九条兼実 {くじょうかねざね} - 藤原忠通の子。のち源頼朝と親交を深め、摂政、関白を歴任。同母弟には『愚管抄』作者で天台座主の慈円がいます。兼実自身の日記『玉葉 {ぎょくよう}』も鎌倉幕府草創期の様子を伝える重要な史料です。

2. 武家政権との対抗

後白河即位の翌年（1156年）、鳥羽法皇の死去直後に保元の乱が勃発します。この原因は、「治天の君」の地位をめぐる崇徳・後白河との争い、藤原氏（摂関家）の「氏長者 {うじのちょうじゃ}」（摂関家の家長）の地位をめぐる忠通 {ただみち} とその父忠実 {ただざね}・弟頼長 {よりなが} との争いによるものですが、ともに2大武士団の源平両氏によって解決をはかったため、彼らを中央政界に進出させることになりました。

保元の乱は、戦う意思のなかった崇徳側にあえて後白河側が奇襲攻撃をかけて勝利をおさめます。

- 後白河側（天皇方） - 藤原忠通・源義朝・平清盛
- 崇徳側（上皇方） - 崇徳（配流）・藤原頼長（戦傷死）・源為義（処刑）・平忠正（処刑）

乱の直後、後白河はいわゆる「保元新制」を発して、荘園整理等の指針を示します。

冒頭に掲げられた、「九州（日本全国）の地は一人 {いちにん} の有 {たもつ} なり。王命のほか、何ぞ私威を施さんや」という言葉は、荘園・公領制を肯定しつつも私的な支配を認めず、これらの最終的な所有者が王（天皇、上皇）であることを宣言したものです。荘園・公領を貴

族や寺院・神社に王が委ねた政務や国家儀礼の遂行に必要な経費をまかなう基盤としたことは、これらが私有地であることを否定し、公地に位置づけるものでした。

後白河は1158年に子の二条天皇に位を譲りますが、院の近臣間の対立、平清盛と源義朝との対立などにより、平治の乱（1159年）が勃発します。

- 藤原信頼 {のぶより}・源義朝→後白河の近臣藤原信西を襲撃（自殺）
- 平清盛→信頼を処刑、義朝に勝利（義朝は尾張で家臣により謀殺）

この乱で最終的な勝利者となった平清盛は、後白河とも友好的な関係を保ち、1167年に武人貴族として初めて太政大臣に就任します。

皇位は、二条の死後、その子・六条（後白河の孫）、高倉（父は後白河、母は清盛の妻の妹）とうつり、高倉と清盛の娘・徳子との間には後の安徳天皇が生まれています。後白河は1169年に出家（僧名は行真）、法皇として政界を主導します。

しかし朝廷・院を主導した後白河と、全国の武士団を背景に政界を主導者した清盛との協力体制は長続きせず、1177年、いわゆる「鹿ヶ谷 {ししがたに} の陰謀」で有力な近臣を排除された後白河は、その2年後に清盛のクーデタによって幽閉 {ゆうへい} されます。

※「鹿ヶ谷の陰謀」については、院の近臣側が平氏の武力を用いて延暦寺をおさえようとしていた時に起きたことから、院の近臣側に平氏倒の動機はなく、延暦寺側との紛争を避けようとした清盛側が、この機会に院の近臣をおさえるために、単なる私的な会合で酔った挙句の放言をとらえて平氏打倒の陰謀にでっちあげたとする説が有力です。

1180年、後白河の子・以仁王 {もちひとおう} が諸国の源氏に平氏打倒を呼びかける令旨 {りょうじ} を発します。これも後白河の意思によるものとする説があります。

以仁王の令旨は治承 {じしょう}・寿永 {じゅえい} の内乱の幕開けとなり、1183年に北陸から京に侵攻した源義仲は平氏を西国に追いやります。

清盛の死後（1181年）、政界の主宰者に復帰した後白河（孫の後鳥羽を即位させた）は、しかし義仲と対立し、関東の源頼朝に義仲追討を命じることになりました。

兄頼朝の命を受けて義仲を討った義経は、平氏を1185年に長門 {ながと} の壇ノ浦 {だんのうら} で滅ぼします。

京に凱旋した義経もその栄光は一瞬で、早くも頼朝と対立し、後白河に迫って頼朝追討の宣旨を出させたものの軍勢が集まらず義経は都落ちします。

こうした混乱の末、頼朝は諸国にいわゆる「守護・地頭設置」を、「日本第一の大天狗 {だいてんぐ}」と批判した後白河に承認させ、鎌倉幕府の土台を固めます。

1189年、頼朝は義経を討った奥州藤原氏を討つために征夷大將軍の地位をのぞみますが、後白河はそれを認めませんでした。

3. 後白河の晩年

1190年。前年に奥州藤原氏を討った頼朝は30年ぶりに幼少期を過ごした京にのぼり、後白河と対面します。

幽閉期はあるものの、約30年間、京の政界の中心にあつて、二条・六条・高倉・安徳・後鳥羽の5代の天皇を父・祖父として朝廷の事実上の指導者（治天の君）として君臨し、保元・平治の乱、平氏政権、義仲・義経の興亡を目の当たりにした後白河はこの時63歳。

北東の外ヶ浜 {そとがはま、津軽半島東部} から南西の喜界島 {きかいじま、鬼界島、あるいは硫黄島} までを支配下に置いた武家の棟梁、頼朝は43歳。

2人の会話がどのようなものだったかはわかりませんが、権大納言 {ごんだいなごん}・右近衛大将 {うこのえのたいしょう} (右大将) に任命された頼朝は直後に辞任して鎌倉に帰還します。

頼朝は九条兼実「法皇、天下の政を執り給う。・・天子 (後鳥羽天皇) は春宮 {とうぐう=皇太子} の如きなり。法皇御万歳 {ごばんざい} の後、また主上 {しゅじょう、天皇} に帰し奉るべし。・・当今 {とうぎん、後鳥羽天皇} は幼年、御尊下 (九条兼実) はまた余算猶遥 {よさんなおはる} か。頼朝又運有 {あ} らば政 {まつりごと} 何ぞ淳素に反 {かえ} らざらんや。当時は偏 {ひとえ} に法皇に任せ奉るの間、万事叶 {かな} うべからず」と、後白河の死後には天下の政治を正しくしたいという思いを述べています。

頼朝は、親政を期待した後鳥羽天皇 (頼朝上洛時は10歳) に、後に娘の大姫 {おおひめ} の嫁入り (入内 {じゅだい}) をはかりますが、この後鳥羽は31年後 (1221年、承久の乱)、幕府打倒を全国に命じることとなります。

後鳥羽の配流後に「上皇」格となった後高倉院 (高倉天皇の子、後鳥羽の同母兄、壇ノ浦の戦い時に安徳天皇とともに平氏軍に乗船) を、壇ノ浦の戦い後に養育したのは祖父の後白河でした。

承久の乱という朝廷・院の失態にあつても幕府が後高倉院に院政をとらせたことは、「上皇・天皇」体制を中世における朝廷の基本形態として選択・確認することになりました。

後白河－高倉－安徳 (母は平徳子)・後高倉院 (母は坊門氏)・後鳥羽 (同左)

後白河が1192年に死去した直後、頼朝は征夷大將軍に任命されます。

※ 頼朝にとって「征夷大將軍」は固執すべき官職ではなく、「右大将」になることで武家の棟梁 {とうりょう} たるにふさわしい官職として満足したとする見解もあります。

※ 頼朝を鎌倉幕府側の正史である『吾妻鏡 {あづまかがみ}』が「右大将」と記しているのは、この官職が征夷大將軍よりも高い官職であるためです。

4. 後白河と院政期・鎌倉期の文化

後白河は『梁塵秘抄』を編さんしたことのほか、多くの文化財の創造にかかわっています。清盛に造営させた京の蓮華王院 {れんげおういん} の本堂は三十三間堂として知られます。

また、承安版『後三年絵』を描かせて武士の残虐なさまを後世に伝えさせています。(承安版は現存しませんが、南北朝期成立の『後三年合戦絵巻』は承安版をもとにしているとされます。)

鎌倉文化を象徴する東大寺の再建も後白河が主導し(重源{ちょうげん}を勧進{かんじん}の責任者に任命)、平氏滅亡の5ヶ月後の1185年8月に大仏開眼を断行します。このとき後白河は奈良時代の開眼時に用いられた筆と墨を正倉院から取り出させ、前月の大地震の余震が収まっていなかったにもかかわらず自ら足場にのぼって開眼を行っています。

『平家物語』の最後を飾る「大原御幸{おおはらごこう}」は、平氏滅亡の翌年、後白河が建礼門院{けんれいもんいん、平徳子}の隠棲する大原を訪ねて語り合う姿を描いたものです。

「人間のあだなるならひは、今さらおどろくべきにはあらねども、御ありさまを見奉るに、あまりにせんかたなふこそ候へ」(人間がはかないのは世の常ですが、あなた(徳子)の様子を見ていると、とてもやりきれません)と述べる後白河に徳子は自身がたどった人生を六道(天上、人間、餓鬼、修羅、地獄、畜生)になぞらえて語ります。

これに後白河は涙を流して「玄奘三蔵{げんじょうさんぞう}は悟りの前に六道を見、わが朝の日蔵上人は蔵王権現の御力にて六道を見たりとこそうけ給はれ。これ程目の当たりにご覧ぜられる御事、誠にありがたふ(珍しいこと)こそ候へ」と述べて一同涙にむせび、日が暮れるなか後白河は帰途につきます。

<整理ノート：11世紀後半～12世紀の流れ>

- ・1068年：(1) 天皇の親政が始まる。
- ・1086年：(2) 天皇が子の (3) 天皇に位を譲る。
- 上皇が天皇を後見する政治体制は「院政」としてしだいに国政を主導するようになった。
- 院政の政庁を院庁{いんのちょう}、発行文書は院宣{いんぜん}・院庁下文{いんのちょう くだしぶみ}という。
- 院政期に建立された法勝寺などは(4) とよばれた。
- 南都北嶺とよばれた(5) や延暦寺の僧兵らはしばしば強訴を朝廷や院に行った。
- こうしたなかで源平武士団らが(6) の武士として院を警固するため京内に拠点を置くようになった。
- 院が政治の主導権をとるようになったため藤原摂関家の権力は低下したが、摂関家の長=(7) の地位や荘園群=(8) はしばしば相続争いの原因にもなった。
- ・1156年：(9) が起こる。
- ・1159年：(10) が起こる。
- ・1167年：平清盛が武士としては初めて(11) に就任した。
- ・1177年：(12) の陰謀。
- ・1180年：(13) が令旨を発して平氏打倒を諸国源氏に呼びかけた。
- ・1180年：平氏による南都焼討ち。
- 朝廷、僧(14) に東大寺再建の勧進を命じた。
- ・1183年：源義仲が入京。平氏は西国へ。
- ・1183年：後白河、源頼朝に(15) の宣旨を発して東国支配を承認した。

- 1184年：源義経、源義仲を討つ。
- 1185年：平氏滅亡。
- 1185年：義経が都落ち。後白河、頼朝に「(16)」設置を承認した。
- 1189年：奥州合戦。奥州藤原氏滅亡。
- 1190年：頼朝上洛。権大納言・(17)に就任。
- 1192年：後白河死去。頼朝、征夷大將軍に就任。
- 1199年：頼朝死去。

1. 後三条、2. 白河、3. 堀河、4. 六勝寺、5. 興福寺、6. 北面
7. 氏長者 {うじのちょうじゃ}、8. 殿下渡領 {でんかのわたりりょう}
9. 保元の乱、10. 平治の乱、11. 太政大臣、12. 鹿ヶ谷
13. 以仁王、14. 重源、15. 寿永二年十月、16. 守護・地頭
17. 右近衛大将

))))))

♪高校日本史講座☆1367 (2009-11-13)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編8＜13世紀＞北条時頼）

((((

人物編8「北条時頼」

1. 北条時頼とは誰か？

36年という短い生涯にも関わらず、北条時頼（1227～63）は、次の点で受験でも必須の鎌倉幕府の第5代執権です。

- 第3代執権泰時の孫であり、4代執権の兄経時が若くして死去したため、祖父泰時が切りひらいた執権合議制を継承し、発展させた。
- 摂家（九条）将軍の4代頼経 {よりつね}・5代頼嗣 {よりつぐ} を京に追放し、後嵯峨上皇の第1皇子・宗尊 {むねたか} 親王を6代将軍に迎えた。
- 就任直後の宝治合戦（1247）で三浦泰村 {やすむら} の一族を滅ぼした。
- 裁判の公正化・迅速化をめざして、評定衆（1225年設置）の下に引付衆 {ひきつけしゅう} を1249年に設置した。
- 執権職を一族傍流の長時に譲ったあとも実権を握り、のちの得宗専制 {とくそうせんせい} の基礎をうちたてた。
- 南宋から亡命し来日した禅僧・蘭溪道隆 {らんけいどうりゅう} を初代住職＝開山 {かいざん} とする建長寺 {けんちょうじ} を建てた。
（禅宗を保護する一方で、法華宗の開祖・日蓮を弾圧した）
- 時頼の政策は、元寇（1274年文永の役、1281年弘安の役）を乗り切ることになる子の北条時宗（8代執権）に継承された。

2. 将軍と執権

鎌倉幕府の首長（鎌倉殿）の将軍（征夷大將軍）は令外官 {りょうげのかん} ですが、源頼朝の前職が権大納言・右近衛大将であるなど、貴族の地位（官位）をもつ者やその子・孫（貴種）が就任しました。

これは、幕府が京都の朝廷に並び立つ政権であることを示すためのもので、源氏3代（頼朝・頼家・実朝）のあとは、摂家（九条頼経・頼嗣）や皇族（宗尊親王ら4人）から迎えられました。

※ 鎌倉幕府の首長を皇族から迎えるという構想は、挙兵時の頼朝がすでに敗死していた以仁王 {もちひとおう} が関東に逃れているという噂を流したことや、北条政子が後鳥羽上皇の皇子を鎌倉に迎えようとするなど、たびたび幕府の課題になりました。

こうした貴種の将軍を補佐して実権を握ったのが北条氏です。

北条氏は平氏の流れで桓武天皇の子孫ですが、清和源氏や桓武平氏の嫡流のように反乱を鎮圧するなどの功績をたてて上級貴族としての地位を得ることもなく、伊豆国の下級官人（在庁官人）として勢力を広げた一族です。

したがって北条氏が将軍になることは不可能で、かわって将軍を補佐する形で幕府の実権を掌握します。

「貴種でありながら実権をもたない将軍を、北条氏が補佐して幕政を指導した」

しかしこうした構図は、将軍と執権が幕政をめぐる対立することや、反執権（北条氏や北条氏の嫡流＝得宗）の立場のものが将軍と結びつく危険性をもつものでした。このため、幼少で将軍に就任し、成人後は京へ送還されるケースが相つぎました。

冒頭で北条時頼を「5代執権」としましたが、これは北条時政を初代執権としてカウントした場合によります。そもそも最初（時政）から「執権」という官職があったわけではなく、時政の子・義時の頃から将軍を補佐する幕府の実質的指導者を「執権」というようになったと考えられています。

- ・ 1203年：有力御家人の比企氏が滅ぼされ、2代将軍頼家が廃された。
- この時、頼家の弟・実朝（母は北条政子）が11歳で将軍となり、その外祖父の北条時政が政所 {まんどころ} の長官（別当）に就任した。
- ・ 1213年：政所長官の地位を継承した義時（時政の子）が有力御家人の和田義盛を滅ぼして侍所の長官の地位をあわせもつようになった。
- 義時の地位は「執権」とよばれるようになった。

北条氏本家を意味する「得宗 {とくそう}」の語が義時の僧としての名「徳宗 {とくそう}」に由来していることから、後世の人々は義時を初代執権と意識していたと思われれます。ただ、「2代執権・泰時」「7代執権・時宗」となると従来のイメージから異なることとなります。

このため、あいまいな執権代数について、日本史教科書の多くは北条氏系図などに執権代数を番号で振るにとどめ、時政を初代、義時を2代、泰時を3代、時頼を5代、時宗を8代執権と本文に表記している例は少ないようです。

3. 謡曲『鉢の木』

すでに同じ中世の時代から、時頼は理想的な武家政権の主宰者として描かれています。まるで水戸黄門のように、諸国をめぐる御家人の窮状を察知して対処する時頼像があります。

以下、かつて使った授業プリントより。（多少の創作を加えています）

ある大雪の夜。上野 {こうずけ、今の群馬県} の佐野荘の館を一人の僧がおとずれた。
「これ {私} は修行者 {しゅぎょうじゃ} にて侯 {そうろう}、一夜 {いちや} の宿 {やど} を
おん貸し候え。」

中からみすばらしい家主が出てきて僧を家にいれる。家主は僧に暖をとるために大切にしていた梅・桜・松をうえた鉢の木を炉に入れて燃やす。やがて家主は、自分が御家人であったが一族にだまされて所領をとられたこと、「いざ鎌倉」の有事があれば真っ先に駆けつける気構えでいることなどを語る。

次の朝、僧はどこへともなく立ち去っていった。

それからしばらくして、鎌倉で有事が起こったとき、家主の佐野源左衛門 {げんざえもん} は、その言葉どおりに真っ先に鎌倉に駆けつけた。そのとき、執権の北条時頼が佐野を見て次のように言った。

「これ (私) こそいつぞやの大雪に宿を借りし修行者よ。見忘れてあるか。今にてもあれ鎌倉におん大事 {だいじ} 出 {い} で来 {く} るならば、・・やせたりともあの馬に乗り、一番に馳 (は) せ参 {さん} ずべきよし申しつる、言葉の末を違 {たが} えずして、参りたるこそ神妙 {しんみょう} なれ」

そして時頼は、佐野のもとの領地支配を認めたとえ、鉢の木にちなんだ領地 (加賀の梅田、越中の桜井、上野の松枝) を与えた。めでたし、めでたし。

<整理ノート：執権政治の流れ>

- ・ 1199年：頼朝死去。→有力御家人 (1) が他の御家人らの運動により鎌倉を追放され、翌1200年に討滅された。
- ・ 1203年：将軍 (2) の重病 (のち回復) を機に北条氏が有力御家人 (3) を謀殺し、同一族も滅ぼした。→ (2) を追放。
- ・ 1203年：将軍 (4) が就任。外祖父の (5) が政所長官として補佐。
<執権のはじまり>
- ・ 1204年：伊豆国の修善寺 {しゅぜんじ} で (2) が謀殺される。
- ・ 1205年：有力御家人の畠山重忠 {はたけやましげただ} が討滅された。
→討滅の中心となった (5) に対する御家人の不満が高まった。
→ (5) が出家して政界を引退。子の (6) が継承した。

1. 梶原景時、2. 源頼家、3. 比企能員、4. 源実朝、5. 北条時政
6. 北条義時

- ・ 1213年：有力御家人の (7) が滅ぼされ、(6) が侍所長官の地位もあわせもつようになった。<執権の地位が確立された>
- ・ 1219年：将軍 (4) が甥の公暁により殺害。
→次期将軍として、藤原摂関家の九条家から幼少の (8) を迎えた。

- 1221年：承久の乱
- 1224年：(6)が死去し、子の六波羅探題(9)が執権を継承。
- 1225年：北条政子死去。(9)の叔父(10)が執権補佐の(11)に就任。
- 1225年：(12)衆を設置。
- 1232年：(13)＜貞永式目＞制定。

7. 和田義盛、8. 九条頼経、9. 北条泰時、10. 北条時房
11. 連署、12. 評定、13. 御成敗式目

- 1247年：執権(14)が(15)合戦で有力御家人(16)を討滅し、同一族も滅ぼした。
- 1249年：(17)衆を設置。
- 1252年：将軍(18)を廃し、後嵯峨上皇の第1皇子(19)を6代将軍として迎えた。
- 1263年：(14)死去。
- 1285年：(20)騒動により、有力御家人(21)が得宗家の御内人{みうちびと}を代表する内管領{ないかんれい}の平頼綱に討滅され、一族も滅ぼされた。
- 1293年：執権(22)が平頼綱を討滅した。(平禅門の乱)
- 1297年：御家人を救済するため、(23)を発令。

14. 北条時頼、15. 宝治{ほうじ}、16. 三浦泰村{やすむら}
17. 引付、18. 藤原頼嗣{よりつぐ}、19. 宗尊{むねたか}親王
20. 霜月、21. 安達泰盛{あだちやすもり}、22. 北条貞時
23. 永仁の徳政令

))))))

♪高校日本史講座☆1368 (2009-11-15)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編9＜14世紀＞足利尊氏・直義）

((((

人物編9「足利尊氏・直義」

1. 尊氏と直義

足利尊氏・直義 {ただよし} の兄弟は、鎌倉幕府への離反、建武政権への参画そして離反、室町幕府の開設を共に協力して進めたにもかかわらず、やがて互いに争い、観応の擾乱 {かんのうのじょうらん、1350-1352年} を起こしたことで知られます。観応の擾乱は、もともと北朝優位の南北朝の対立を複雑化させ、長期化させる原因になりました。

<室町幕府成立の過程>

- ・1324年：(1) の変。後醍醐天皇による最初の討幕計画、失敗。
- ・1331年：(2) の変。→後醍醐天皇は隠岐へ配流。
- ※ 河内の (3) や後醍醐の子 (4) らの反幕活動が盛んになる。
- ・1333年：鎌倉幕府の有力御家人の (5) が京都の六波羅探題を滅ぼす。
→上野を拠点とする御家人 (6) が鎌倉を攻撃し、鎌倉幕府は滅亡。
→建武政権が発足。
→(5) の弟 (7) は後醍醐の皇子を補佐し、鎌倉 (鎌倉将軍府) へ。
- ・1335年：最後の得宗 (8) の遺児 (9) が挙兵。鎌倉を奪回し、(10) の乱が起きる。→これを鎮圧した (5) は鎌倉で建武政権に離反。一時京都を制圧するが敗れて九州へ逃れた。
- ・1336年：(5) が九州から攻めのぼって京に入った。
- ・1336年：(5)、施政方針を (11) に示した。<室町幕府の開府>
→吉野に逃れた後醍醐天皇<大覚寺統>と (5) が擁立した (12) 天皇<持明院統>の「一天両帝、南北京」の南北朝時代が始まる。
- ・1338年：(5)、征夷大将軍に就任。
- ・1339年：後醍醐天皇、死去。

1. 正中、2. 元弘、3. 楠木正成、4. 護良 {もりよし} 親王

5. 足利尊氏、6. 新田義貞、7. 足利直義、8. 北条高時、9. 北条時行
10. 中先代、11. 建武式目、12. 光明

2. 尊氏・直義と北条氏

尊氏・直義は足利貞氏 {さだうじ} と側室上杉清子との間に、尊氏は1305年、直義は翌06年か07年に生まれています。

足利氏は清和源氏の流れで鎌倉幕府の有力御家人、本拠地の下野のほか、陸奥や三河、西国にも所領をもつ名族で、代々の当主は鎌倉で生まれ育ったと考えられますが、これらの所領を拠点に陸海の交通路を通じて京都や西国の情報や商業とも結びつく位置にいました。

足利氏は北条氏とも密接な関係を持ち、鎌倉幕府開設時に足利義兼は北条時政の娘を妻とし、以後の足利氏代々の当主（惣領）の多くは北条氏から正室を迎えています。

○足利氏代々の当主と正室

義兼－北条時政の娘（政子の妹）

義氏－北条泰時の娘。

泰氏－北条時氏（泰時の子、時頼の父）の娘。

頼氏－上杉重房の娘。

家時－北条時茂（義時の孫）の娘。

貞時－北条顕時（実時の子）の娘。上杉清子は側室。

尊氏－北条守時の妹。

義兼・家時・尊氏をのぞき、代々の当主の母は北条氏です。このため、尊氏・直義は、時政・義時・泰時らの血を幾重にも享 {う} けた子孫でもありました。

尊氏らが北条氏を先祖と意識していたことは、建武式目にあるべき政治の規範として、「遠くは延喜・天曆両聖（10世紀の延喜・天曆の治）の徳化を訪ひ、近くは義時・泰時父子の行状をもって、近代の師となす。」と示していることからわかります。（「延喜・天曆の治」を掲げたのは、これを政治の基本としていた後醍醐天皇との和解が一時成立していたためです。後醍醐の京都脱出→吉野への移住は式目作成の翌月、1336年12月のことでした。）

また、受験でも必須の「御成敗式目（貞永式目）が室町時代も武家の基本法典としての命脈を保った」、「室町幕府開府以後の追加法を、＜御成敗式目の建武以降の追加法＞という意味で建武以来追加という」ことなども、同様の意識によるものだといえます。

室町幕府の中央機構も鎌倉幕府と同じように、侍所、政所、評定衆、引付が置かれており、管領 {かんれい} は鎌倉幕府の執権にあたるものと理解できます。

（受験では、室町時代の侍所の職掌が京都の市政・裁判・警察業務に及んでいる点で鎌倉幕府のそれとは異なる点が必須事項です。）

京都を所在地とする室町幕府に六波羅探題にかわる職は不要ですが、かわって鎌倉には鎌倉府（関東府）を置き、長官の鎌倉公方（関東公方）は足利基氏 {もとうじ、尊氏の子} 以後、

足利氏が世襲します。このあたりは六波羅探題を北条氏が世襲したことに通じるものがあります。

3. 兄弟対立の原因

光明天皇を即位させた1336年8月、尊氏は、次のような願文 {がんもん} を清水寺に納めます。

「この世は夢のごとくに候、尊氏にたう心（道心）たは（賜）せたまい候て、後生（ごしょう）たす（助）けさせをはしまし候べく候、なおとんせい（遁世）したく候、・・・今生（こんじょう）のくわほう（果報）にかえて、後生たすけさせたまい候べく候、今生のくわほうをば直義にはせ給候て、直義あんをん（安穩）にまも（守）らせ給べく候」

これから室町幕府を開設しようとする人物が出家や俗世（ぞくせ）をはなれる遁世（とんせい）を考えていたとは少々驚きです。最後の部分で弟の直義に果報（幸福）が授けられるように祈っていますが、あるいは、この頃の尊氏は真剣に出家なり遁世して、自分自身の地位を直義に譲ろうと考えていたのかもしれませんが。

尊氏・直義の兄弟対立の原因については、鷹揚 {おうよう} な性格の尊氏が將軍の権限のうち恩賞などの主従制的支配権を担い、生まじめで禅僧・夢窓疎石 {むそうそせき} とともに高次元な問答をしたことでも知られる直義が同じく將軍の権限のうち裁判などの統治権的支配権を担うという、將軍権力の分担を重視する見方が一般的です。当時の人びとも「二人大樹 {たいじゆ=將軍}」と認識していたようです。

この2極化した権力に足利氏代々の家来（執事）高師直 {こう（の）もろなお} と直義との争いがからみ、観応の擾乱に至ります。

師直は既存の体制を否定する武将の代表格で、天皇・上皇が必要ならば「木や金でつくり、生きているそれを流してしまえ」と放言したとされ、莊園侵略などに乗り出しました。

対象的に直義は既存の体制を守ることに専心し、多くの貴族から信頼される人物でもありました。

観応の擾乱は、直義の勝利（高師直らを殺害）・尊氏の勝利（直義の降伏、のち死去）と展開し、南北朝の内乱を長期化させます。

直義の死については、病死説のほか尊氏による毒殺説もあります。

十数年前、日本史の常識をくつがえすような研究発表がありました。それは、教科書でもおなじみの神護寺（じんごじ）所蔵の源頼朝像が、実は頼朝を描いたものではなく、直義を描いたものとする米倉迪夫氏の研究によるものです。

（平凡社版『絵は語る』シリーズ第4巻『源頼朝像－沈黙の肖像画』など）

また、従来「足利尊氏像」とされたものが尊氏でなく高師直を描いたものとされてきましたが、米倉氏は「平重盛像」（神護寺所蔵）こそ尊氏を描いたものだと提唱しています。

<整理ノート：14世紀後半の流れ>

- ・1350～52年：尊氏・直義の対立による（13）が激化。
- ・1358年：尊氏、死去。
- ・1367年：2代将軍義詮（よしあきら）死去。
→3代将軍に10歳の（14）が就任。
- ・1368年：中国大陸では明が成立。
- ・1378年：幕府を三条坊門から北小路室町に移転（花の御所）。
- ・1391年：（15）で有力守護（16）を討滅。
- ・1392年：南北朝の合体（合一）を実現。
南朝の（17）天皇と北朝の（18）天皇が和解。
- ・1392年：朝鮮半島では（19）が朝鮮王朝を樹立。
- ・1399年：（20）で有力守護（21）を討滅。

13. 観応の擾乱、14. 足利義満、15. 明徳の乱、16. 山名氏清
17. 後亀山、18. 後小松、19. 李成桂、20. 応永の乱
21. 大内義弘

))))))

♪高校日本史講座☆1368 (2009-11-21)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編10<15世紀>山名宗全）

((((

人物編10「山名宗全」

0. 「例」と「時」

戦国時代の末期に成立したとされる説話集『塵塚 {ちりづか} 物語』には、次のようなエピソードがあります。口語訳は私（松井）によるものです。

その内容は、室町幕府の中央政界でも重要な役職を歴任した武将である山名宗全 {やまなそうぜん} と、貴族階級に属するある大臣との問答という形式をとっています。

山名宗全が、応仁・文明の乱のころ、ある貴族（大臣）の邸 {やしき} で、乱世に突入した当時のことについて、多くの人々が苦しい思いをしている様子などを語り合いました。

この邸の大臣は何かにつけて今日の前で起きていることと過去の例（先例）とを比較してあれこれと話します。しかし、宗全はきっぱりと次のように述べました。

「貴方様（君）の仰せになることは一応ごもつともなことです。しかし、今起きていることを過去の例と比較して述べるのは、よいことではありません。今後は「例（先例）」を「時（時勢）」という語に置きかえてお考えください。（向後は時といふ文字にかへて御心えあるべし。）」

過去の規範に縛られて私たちが受動的に行動する「例（先例）」が通用する世は終わったのですから、今後は過去の規範にとらわれず、自分自身が「時勢」の中で主体的に未来を切り拓かなければいけない時代なのです。

本当にこうした会話がなされたとは思われませんが、戦国末において、宗全が新しい時代（下剋上の時代）の到来を認識していた人物とみなされていたことがわかります。

1. 山名宗全の前半生

今回、15世紀を代表する人物に山名宗全 {やまなそうぜん、1404-1473} を選んだ理由は、日本史教科書に登場する人物の中で、比較的長く室町幕政に関わった人物であることや、応仁・文明の乱など多くの有名な事件に関わった武将であること、などによります。

新刊の吉川弘文館の人物叢書シリーズ（未読）で宗全は、領国経営に優れた手腕を発揮した「剛毅」な武将として分析されています。

○山名氏

山名氏は清和源氏の流れで、室町幕府の初代将軍・足利尊氏のライバルでもあった新田義貞を出した新田氏の一門に属し、上野国の山名郷（今の群馬県高崎市）を本拠する鎌倉幕府の御家人の一族でした。しかし山名氏は、鎌倉時代の末期や南北朝期は足利氏と行動を共にして活躍し、14世紀末には一族で11か国（全国66か国の6分の1）の守護職をもつ大勢力（「六分の一衆」）になっています。

山名氏清が1391年の明德の乱で滅ぼされたあと、山名一族は但馬{たじま}・伯耆{ほうき}2か国の守護職だけを保つ地位に転落しました。

このうちの但馬守護の家に生まれたのが山名持豊{もちとよ}、すなわち宗全です。

宗全は28歳で家督{かどく}を相続したとき、これに不満を抱く兄と戦うことも経験しています。

1440年、幕府に真面目に仕えた宗全は侍所の長官（所司）になりますが、その翌年に嘉吉の変{かきつのへん}に遭遇します。6代将軍・足利義教が殺害されたという事件です。この時、宗全は将軍殺害の場に、将軍に従う有力武将として居合わせていましたが、宗全はあえて赤松側に抵抗せず赤松邸を脱出しています。

その後、宗全が播磨に向かった赤松勢を追って討滅に功績をおさめたため、山名一族は、備後・安芸・石見・備前・美作・播磨の守護職を与えられ、かつての勢力を取り戻しています。こうして幕府での地位を確保した宗全は、婚姻政策によって細川・大内・斯波・六角氏などと結びつきを深めて権勢を誇った末、1450年に家督を子に譲って出家します。年齢では40代半ば、もう自分自身のなすべき役目を果たしたから静かに隠居生活に入ろう、そう思ったのではないのでしょうか。（その後、将軍義政と対立して4年間を領国の但馬で過ごし、ゆるされて京に戻ります。）

そして、歴史の流れは宗全をその表舞台に引き出すことになります。

2. 有力守護大名家の家督争いと応仁・文明の乱

当時の武家社会では、鎌倉時代に見られた分割相続から、南北朝時代の頃から嫡子の単独相続へと移り変わっていました。

将軍（室町殿）の家来の中でも有力な武将は守護に任命されましたが、それは鎌倉時代の守護とは異なり、土地・武士に対する権益や権限を強く領国に及ぼすようになっていました。これを守護領国制といいます。

このため、それぞれの守護大名家では家督相続をめぐる争いが激化します。家督を相続できるものは全ての権限・利益（権益）を入手できます。しかし、そうでないものは全ての権益を失うことになるからです。

特に幕政を主導する地位の管領家（細川、斯波{しば}、畠山）のうち斯波・畠山両氏における家督相続争いは熾烈{しれつ}をきわめ、応仁・文明の乱（1467ー77年）を引き起こ

す原因になりました。畠山氏の争いは乱後8年も続き、山城の国一揆（1485年）を招くことになりました。

斯波氏の場合、それを補佐する守護代の織田家の家督相続の争いにも幕府が介入するという事態を招いています。

こうした守護大名家や守護代家の争いは、その裁定をめぐり、もともと舅・婿の関係にあった幕政指導者の山名宗全と管領 {かんれい} 細川勝元（宗全の養女が勝元の妻）との争いを引き起こすことになりました。

○応仁・文明の乱

（東軍）一足利義視 {あしかがよしみ}、細川勝元、畠山政長、斯波義敏 {よしとし}、富樫政親 {とがしまさちか} ら。

（西軍）一日野富子・足利義尚 {よしひさ}、山名宗全、畠山義就 {よしひろ}、斯波義廉 {よしかど}、大内政弘ら。

→乱後、日野富子と義視との対立は一時解消し、9代将軍義尚が1489年に26歳で死去すると、富子は義視の子（義材 {よしき} = 義植 {よしたね}）を10代将軍に就任させています。（しかし富子は3年後に義材を廃し、義政の甥・義澄 {よしずみ}）を11代将軍に就けています。明応の政変です。）

宗全・細川勝元は応仁・文明の乱の最中にともに病気で死去し、1477年にそれぞれの後継者である山名政豊 {まさとよ} と細川政元 {まさもと} との間で和議が成立し、乱は終わります。政元は、後に空を飛ぶことばかりに専念して幕政を顧みなくなり、家臣に殺された人物です。

※ 余談ですが、山名氏は江戸時代に但馬に6千700石の所領をもつ旗本となり、1869年（明治2）の石直 {こくなお} しで1万石余の村岡藩になります。

※ 畠山氏は、政長の系統が江戸時代に旗本（高家 {こうけ}）になります。

3. 応仁・文明の乱の意義

11か年に及ぶ京都での戦乱（応仁・文明の乱）は、京都を焼け野原にしました。

それまで在京が原則だった守護大名や幕府直属の奉公衆 {ほうこうしゅう} の多くは領国に下向し、領国内の国人ら（彼らが結んだ軍事同盟が国人一揆）と格闘することになりました。

国人らを屈伏させて領国の一元支配に成功した守護大名（戦国大名）は武田・今川・大内・大友各氏に代表され、守護代では織田氏・朝倉氏（ともに管領家の斯波氏の守護代）などが守護を押しつけて戦国大名に成長します。

これとは対照的に、安芸国の毛利氏は、国人一揆の代表者として守護大名や守護代の権力をしのご権力を領国に及ぼし、やがて中国地方を制覇することになりました。三河の松平（徳川）氏も国人から成長しています。

文化史上の意義としては、京の貴族が守護大名のもとに移住し、京文化を地方に根づかせる要因になりました。京文化になじんだ守護大名・奉公衆らの領国下向も見逃せない要素です。それを代表する都市が、周防〔すおう〕の大内氏の城下町山口や、駿河の今川氏の城下町駿府〔すんぷ〕です。駿府は今の静岡市です。

<整理ノート：15世紀の流れ>

- ・1408年：室町3代将軍・太政大臣を歴任し、「日本国王」として明との国交樹立・貿易を実現した（1）が49歳で死去した。
- 4代将軍は子（2）が継承した。父が始めた明との（3）貿易を中断させた。（朝貢形式や「日本国王」を名のことへの反発が原因とされる）
- ・1417年：関東管領も歴任した（4）が反乱を起こした。
- ・1419年：朝鮮国が対馬等を倭寇の拠点とみなして攻撃した。＝（5）
- ・1422年：4代将軍（2）が子の義量〔よしかず〕に将軍職を譲った。
- ・1425年：5代将軍義量が17歳で死去（原因は酒の飲み過ぎ）。
- （2）が将軍職に再就任した。
- ・1428年：（2）が死去した。後継将軍を幕政担当の有力守護らに委ねた。
- 候補者名を記した紙を石清水八幡宮から1つ持ち帰る「くじ引き」で選定。
- （1）の子で天台座主〔てんだいざす〕が6代将軍（6）に就任した。
- ・1428年：わが国で初の「土民蜂起」の（7）が起きた。
- ・1433年：6代将軍（6）が（3）貿易を再開させた。
- ・1438～39年：（8）－鎌倉公方の（9）が討滅された。
- ・1440年：（9）の遺児を擁立した（10）が関東で起きた。
- ・1441年：（11）－6代将軍（6）が有力守護（12）に殺害された。「将軍此〔かく〕のごとき犬死〔いぬじに〕、古来その例を聞かざる事なり。（看聞御記）」
- 7代将軍は子の義勝（43年病死）、8代将軍はその同母弟（13）が継承した。
- 幕府が（12）の討滅に専念したため生じた政治的な空白期に大規模な一揆＝（14）が起き、京都が彼ら一揆勢に制圧された。
- 幕府は初めて（15）を発した。
- ・1467－77年：応仁・文明の乱
- ・1485年：（16）－南山城から畠山氏が追放された。
- ・1488年：（17）－加賀守護（18）を自害させた。
- ・1493年：（19）－10代将軍が廃位された。
- 同年の戦国大名（20）による伊豆侵攻とともに、戦国時代の幕開けを象徴する出来事でもあった。

1. 足利義満、2. 足利義持、3. 勘合、4. 上杉禅秀 {ぜんしゅう}
5. 応永の外寇 {おうえいのがいこう}、6. 足利義教
7. 正長 {しょうちょう} の徳政一揆=土一揆 {つちいっき}
8. 永享の乱、9. 足利持氏、10. 結城合戦
11. 嘉吉 {かきつ} の変、12. 赤松満祐 {あかまつみつすけ}
13. 足利義政、14. 嘉吉の徳政一揆、15. 徳政令
16. 山城の国一揆、17. 加賀の一向一揆
18. 富樫政親 {とがしまさちか}
19. 明応の政変 {めいおうのせいへん}、20. 北条早雲 (伊勢宗瑞)

))))))

♪高校日本史講座☆1370 (2009-11-23)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編11<16世紀>織田信長）

((((

人物編11「織田信長」

1. 信長がめざした秩序

信長は、従来、中世的なシステムを否定・破壊して近世的なシステムの地歩を築いた存在として位置づけられていましたが、近年では戦国時代に衰退した朝廷・幕府の権威回復につとめたことに力点がおかれるようになっていきます。

信長は、室町幕府の三管領家の一つ斯波 {しば} 氏の領国の一つ尾張国の守護代織田氏の支流の家に生まれましたが、父・信秀の頃にはすでに京都の公家も驚くほどの勢威を誇っていました。この背景には、信秀が陸上交通の要所や津島など伊勢湾に面する商業都市を支配下に置いていたことがあります。

信秀は、早くから朝廷と結びつき、信秀は伊勢神宮の遷宮 {せんぐう} に際して朝廷に多額の献金をしたことで知られます。

信長自身も1559年に尾張統一を成し遂げた後、自ら上京し、13代将軍足利義輝 {よしてる} に謁見しています。

戦国動乱の中で衰退していたとはいえ、政治の中心地である京都に存在する朝廷・室町将軍家を信長は支援すべき「天下」と認識し、その姿勢は室町幕府滅亡（1573年）まで抱き続けることとなります。

1560年、信長は桶狭間 {おけはざま} の戦いで駿河・遠江・三河を支配していた今川義元を討ち、その武名を日本中に広めます。

67年、美濃斎藤氏の稲葉山城 {いなばやまじょう} を陥落させ、ここを居城にし、「岐阜 {ぎふ}」と名づけます。

この間、65年に将軍義輝が松永久秀らに殺害された頃から、信長は「麒麟 {きりん}」の「麟」の文字を崩した花押 {かおう、手書きのサイン} を用い、「天下」の回復を自らの意思として示すようになったとされます。（麒麟は、中国で生まれた想像上の動物で、戦乱が終わった時に現れるとされていました）

この花押は、岐阜移住の頃から使い始めた「天下布武 {てんかふぶ}」の印章とともに信長は生涯用いることとなります。

信長は岐阜移住と戦後して、越前の朝倉氏などに亡命していた足利義昭（義輝の弟）と交渉をもち（その義昭側の使者になったのが、室町幕府の奉公衆＝直属家臣で美濃に所領をもった明智氏の子孫・光秀だったとされます）、1568年に義昭を伴って上洛し、彼を15代将軍につけることに成功しています。

しかし、ほぼ同年齢の義昭と信長は、幕政の主導権をめぐって対立。信長は義昭の意をうけた周辺の諸大名（朝倉、浅井、武田、石山本願寺、延暦寺ら）との戦いに奔走することになりました。

そして、1573年に義昭は京都を追放され、事実上室町幕府が崩壊します。

1575年、長篠の合戦で武田勝頼（7年後に一族滅亡）をやぶった信長は、以後、石山本願寺、西国（毛利氏など）、北陸（越後の上杉氏）への攻略を進めます。

1580年に石山本願寺と和睦、82年には武田氏を滅ぼします。

本能寺の変の直前（82年5月）、朝廷は信長に「関白か、太政大臣か、征夷大將軍のいずれかに任命したい」という意向を示しますが、信長はこの回答をしないまま変を迎えます。

おそらく信長がめざしたのは、上記の3職いずれでもなく、あるいは一度はいずれかの職につくにしても、最終的には「日本の王」、または秀吉が構想した「アジアの王」（中国・日本それぞれに天皇・関白を置くという）に似たものだったと思います。

秀吉が断行する明征服計画（朝鮮出兵）も、すでに信長が構想していたものでした。

2. 信長が残したもの

信長の先進性を示すものに、長篠の合戦に見られた鉄砲隊の使用、安土城など天守閣をもつ城郭の創建などがありますが、いずれも信長の独創ではありませんでした。

信長の鉄砲隊が武田の騎馬軍団をやぶったことは事実ですが、信長はまた石山本願寺や根来・雑賀（さいか）などの鉄砲隊に悩まされてもいます。信長にとって「鉄砲隊」は自らの天下統一を妨げる重要な敵だったのです。

安土城も、その先駆的な城郭である松永久秀の多聞山城（たもんやまじょう、1562年、大和に築城、四重の天守をもち、その櫓（やぐら）から多聞櫓という名が後世に伝わっています）を模倣・拡大させたものでした。

松永久秀は、主君（三好氏）や将軍（義輝）を殺し、東大寺の大仏殿・大仏を焼き払ったことなどから日本史上でも「悪人」とされる人物です。信長は久秀を「主君（三好氏）を殺し、将軍を殺し、大仏を焼いた極悪人」と述べています。

しかし久秀は、茶器などの収集・鑑定に長けた文化人でもありました。久秀は1568年に上洛した信長に臣従し、のちに反旗をひるがえして信貴山城（しぎさんじょう）で自爆死しますが、もしも明智光秀が天下統一を達成していたら、将軍（義昭）を追放し、延暦寺を焼き払い、一向一揆・荒木村重一族などへの大量虐殺を行った信長もまた「極悪非道の人」として歴史に名をとどめたことでしょう。

信長は、後継者の秀吉が太閤検地・刀狩を行って近世社会の基礎を築き、さらにその後継者となった徳川家康が幕府を開設して3世紀にわたる太平の世を築いたため、「近世の扉」を開いた人物として位置づけられています。たしかに、信長が畿内・中部地方を支配下においたため秀吉の天下統一がその後8年にして達成されたことを考えれば、信長の果たした功績は決して小さなものではありません。

(オセロゲームでいえば、信長は4つの隅のうち2つか3つほどおさえて秀吉に譲ったといえます)

しかし本能寺の変時の信長の国家構想はまだまだ明確なものではなく、信長が長生きしていたとしても、秀吉のように徹底的な検地の断行を行ったかどうかは不明です。

また、明征服にのり出す限り、秀吉のように失敗するか、成功したとしても次はヌルハチら満州の女真族(のちに後金{こうきん}、清を建国)と戦わなければならない、いずれにしても織田政権は動揺あるいは崩壊したことでしょう。

信長が朝廷の権威回復につとめたことは、その後も秀吉・家康に継承されます。

(江戸幕府は禁中並公家諸法度で天皇の権限を制限しましたが、朝廷の諸儀礼を復活させるなど権威の回復には力を注いでいます。)

<整理ノート：16世紀後半の流れ>

- ・1560年：織田信長が(1)の戦いで今川義元を討つ。
- ・1568年：信長上洛。(2)が15代室町幕府将軍に就任。
- ・1570年：信長、(3)の戦いで朝倉・浅井両氏を破る。
- ・1570年：石山本願寺が信長との戦いを諸国の門徒に呼びかける。
(10年余に及ぶ石山戦争の開始)
- ・1571年：信長、比叡山延暦寺を焼き討ち。
- ・1572年：武田信玄が上洛軍を發し、徳川家康を(4)の戦いで破る。
→翌73年、信玄は陣中で病死。
- ・1573年：信長、(2)を追放。<室町幕府、滅亡>
- ・1574年：信長、伊勢国(5)の一向一揆を弾圧(虐殺)。
→朝倉氏滅亡後の(6)国で一向一揆が起こる。(翌年弾圧)

1. 桶狭間、2. 足利義昭、3. 姉川、4. 三方が原、5. 長島、6. 越前

- ・1575年：信長・徳川家康連合軍、(7)の合戦で武田勝頼を破る。
- ・1576年：信長、近江国に(8)城を築城。
- ・1580年：信長、石山本願寺と和睦。
- ・1582年：武田氏滅亡。
- ・1582年：信長、(9)の変で敗死(自殺)

- ・ 1582年：羽柴秀吉、明智光秀を討つ。

7. 長篠、8. 安土、9. 本能寺

- ・ 1583年：秀吉、(10) の戦いで柴田勝家を破る。
- ・ 1584年：秀吉、(11) の戦いで徳川家康と戦う。(のち和睦)
- ・ 1585年：秀吉、(12) に就任。
- ・ 1586年：秀吉、(13) に就任。「豊臣」姓を名のる。
- ・ 1587年：九州攻め。(14) 追放令を発令。
- ・ 1588年：後陽成 {ごようぜい} 天皇を京都の居館 (15) に招く。
- ・ 1588年：海賊取締 (停止・禁止) 令、刀狩令を発令。
- ・ 1590年：関東の北条氏滅亡、東北の伊達政宗ら服属。天下統一を達成。
- ・ 1592年：(16) の役 (壬辰倭乱) 開始。
- ・ 1597年：(17) の役 (丁酉再乱) 開始。
- ・ 1598年：秀吉、死去。

10. 賤ヶ岳、11. 小牧・長久手、12. 関白、13. 太政大臣
 14. バテレン (宣教師)、15. 聚楽第 {じゅらくてい}
 16. 文禄、17. 慶長

))))))

♪高校日本史講座☆1371 (2009-12-02)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編12<17世紀>徳川光圀）

((((

人物編12「徳川光圀」

1. 虚構と真実

『水戸黄門』（TBS）は1969年（昭和44）に放送が始まり、今年（2009年）で40年という長さを誇るテレビ番組として知られます。

主演の水戸黄門こと徳川光圀 {とくがわみつくに} を演じる俳優も今の里見浩太朗さん（2002年に登場）で5代目になります。

いうまでもなく、「水戸黄門」という別称は、徳川三家（御三家）の一つ水戸家の当主で、権中納言 {ごんのちゅうなごん=中納言格} という官職の中国風の尊称（黄門）に由来します。中国風尊称で有名な語に「首相」「宰相」「太閤」等があります。国政主導者の内閣総理大臣を意味する「首相・宰相」、大臣の「～相」は現代も通用する語句です。

テレビの光圀は諸国を旅しますが、史実の光圀は水戸・江戸間の往来や関東の寺社や景勝地以外に旅をしたことがありません。

にもかかわらず光圀が諸国をまわって悪代官などを退治したという話が江戸時代にできたのは、光圀自身にそうした伝承にふさわしい名君というイメージがそなわっていたからだと思われます。

光圀のように諸国を旅した伝承をもつ人物に鎌倉時代の北条時頼がいます。時頼が御家人の窮状を視察したという伝承は、御家人から尊敬された政治家だったのかどうかを考える上で一つの素材になります。

今号では、徳川光圀を江戸時代前期の17世紀を代表する人物として取り上げたいと思います。

2. 青春期の光圀

徳川光圀（1628-1700）は、徳川家康の末子・頼房（水戸徳川家の祖）の3男として生まれます。

水戸徳川家は、尾張徳川家・紀伊徳川家とともに三家（御三家）の一家であり、将軍本家の断絶にそなえて将軍を出す家でした。（水戸徳川家出身の将軍は15代慶喜が有名です。）

徳川三家に限らず大名の後継者（世子）は江戸で生活するため、光圀も江戸で生まれ、江戸で青春期を過ごしたことでしょう。

3男であった光圀が長兄の頼重（次兄は夭折）をさしおいて水戸徳川家の後継ぎになったことについて、歴史学者の山室恭子氏は、光圀が後継ぎに決まった1

633年の時点で3代将軍家光にまだ後継男子が生まれておらず、三家の後継者の中で最年長者である頼重が「4代将軍」になることを頼房が避けたためとしています。

三家の中で格の低い（頼房が末弟のため）水戸徳川家が「4代将軍」の候補になることは徳川家分裂の政争を招く。—頼房はそう判断したのかもしれませんが。

（この頃はまだ徳川将軍家の相続も安定せず、1631年には家光の弟・忠長が甲府に蟄居〔ちつきよ〕を命じられ、34年1月に自害しています。）

頼重は高松藩主となり、その代わりに頼重の子綱條〔つなえだ〕が光圀の養子になって水戸藩主をつぎ、光圀の子頼常が頼重の養子となり高松藩主をつぐこととなります。（後に、家光に子・家綱が生まれ、頼房が心配する事態にはなりませんでした。）

若き日の光圀は、家臣から「ごんごどうだんのかぶき人（言語道断の傾〔かぶ〕き人＝かぶき者）」と注意されるほど、水戸徳川家当主としての未来が危ぶまれる人物でもありました。

戦国動乱が大坂の役（1614－15年）で終了したあとも、若い武士層の間には戦国の下剋上〔げこくじょう〕の風がさめやらず、再び動乱の時代が到来することへの願望がありました。こうした願望から華美ないでたちで周囲を驚かせた彼らは「かぶき者」とよばれました。

17世紀前半に青春期を江戸で過ごした光圀も、家康の孫でありながら、こうした若い武士層の願望の影響を受けて育ったと思われます。

3. 名君・光圀

いわゆる「中継ぎ」として水戸家当主になった光圀は、学問や儀礼の興隆という文治政治を代表する名君として活躍し、彰考館〔しょうこうかん〕をもうけて『大日本史』編纂などの文化事業をおこないます。

3代将軍家光までの武断的な政策（武家諸法度などに違反する大名を改易〔かいえき〕などで排除）から、4代将軍家綱〔いえつな〕に始まる文治政治への政策転換の波に乗って実行した代表的な藩主が光圀でした。

こうした事業に大きな影響を与えた人物が、明滅亡により日本に亡命してきた貿易家・軍人で儒学者（朱子学・陽明学の間で実学的な学風）の朱舜水〔しゅしゅんすい、1600－1682〕です。朱舜水は光圀を「日本の魯王〔ろおう〕」と仰ぎ、水戸藩の学者とも深く交わり、江戸で死去します。

魯王は儒学の祖・孔子を保護した君主という意味をもちます。（魯王と孔子の関係について史実は諸説あります。）

光圀の名君ぶりを伝える逸話には、5代将軍綱吉に犬の皮を送りつけたというものがありますが、庶民の生類憐みの令に対する不満が名君とされた光圀像と結びついたのでしょう。(綱吉は光圀の従兄の子で18歳年下)

史実としては、領内に生類憐れみの令のような法令を出すことなく、鶴を殺した者を死罪に命じながらもものに執行を中止したという事例などが残されています。

4. 紋太夫事件

藩主の地位を綱條にゆずった4年後の1694年(元禄7)11月、光圀は水戸藩家老(大老)の藤井紋太夫{もんだゆう}を江戸・小石川の藩邸で自らの手で殺害します。

目撃した家臣は、「血の胴へ落ちる音、がうがうと聞こえ候て、そのまま事切れぬ。」と記録しています。

紋太夫手討ちの原因は不明ですが、紋太夫が綱條を藩主の座から降ろそうとした説、側用人の柳沢吉保に内通していたとする説など様々あります。

綱條は紋太夫の遺児2人も処刑しようとしませんが、光圀はこれを助命嘆願しています。

晩年の光圀は、水戸から20キロも離れた西山に居をうつし、百姓のかわりに年貢の減免を役人に願い出るなどのエピソードも残しながら、17世紀末の1700(元禄13)年12月、72歳で死去します。

年明けた1701年(元禄14)4月には赤穂事件の発端を告げる江戸城松の廊下での刃傷事件が起こります。

<整理ノート：17世紀の流れ>

- ・1603年：徳川家康、征夷大將軍に就任。
- ・1605年：家康、將軍職を子の(1)に譲る。
- ・1615年：大坂の役で豊臣氏滅亡。
→同年、大名に一国一城令・(2)<元和令>、朝廷に(3)を発令。
- ・1635年：(2)<寛永令>で大名の江戸参府=(4)を義務づけた。
- ・1639年：(5)船の来航を禁止。
- ・1651年：3代將軍(6)、死去。慶安の変=(7)の乱が起こる。
→大名に対する武斷的な威圧政策を転換させた。(いわゆる文治主義の政治へ)

【文治政策で知られる17世紀の「名君」】

- 加賀国金沢藩主(8)—朱子学者(9)を招いた。
- 備前国岡山藩主(10)—陽明学者(11)を登用した。
- 常陸国水戸藩主(12)—江戸に彰考館を設け、(13)を編さん。
- 陸奥国会津藩主(14)—朱子学者(15)に学んだ。

- ・1657年：明暦の大火

・1680年：4代将軍家綱、死去。弟の（ 16 ）が5代将軍に就任。
→1685年から生類憐みの令を発令。

1. 徳川秀忠、2. 武家諸法度、3. 禁中並公家諸法度、4. 参勤交代
5. ポルトガル、6. 徳川家光、7. 由井正雪、8. 前田綱紀
9. 木下順庵、10. 池田光政、11. 熊沢蕃山、12. 徳川光圀
13. 大日本史、14. 保科正之、15. 山崎闇齋、16. 徳川綱吉

))))))

♪高校日本史講座☆1372 (2009-12-05)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編13<18世紀>田沼意次）

((((

人物編13「田沼意次」

0. 歴史人名の再表記

教科書などの歴史上の人物の名前の記述をみると、最初はフルネームで記述されますが、2回目以降の記述（以後、「再表記」）は姓（氏）か名で表記されています。

（例）「天下統一事業に乗りだしたのが織田信長である。信長は尾張の守護代の家に生まれ・・・。1560年、信長は・・・」

こうした再表記は、近世あたりまでは名（道長、頼朝、家康など）が、近代以後は姓（西郷、大久保、伊藤、吉田）が一般的です。

こうした表記が異なるのは、近世までは藤原氏・徳川氏など同族の人物と区別するためでもあります。菅原道真が「菅原」でなく「道真」と表記されるのが一般的であることを考えると、別の要素によるものと見ることができます。

それは、彼らが歴史上の制約を受けながらも個性的に活躍したことによるのではないかと私は思います。

一方、「姓（氏）」を表記する場合は、制度の枠組みの中で出世などして活躍した人物などがこれに該当すると思われます。

それでは、こうした再表記が「名」から「姓（氏）」の境目はどこにあるのかを教科書などで眺めてみると、私は、18世紀の田沼意次 {たぬまおきつぐ} あたりからではないかと思えます。

彼は「田沼」「意次」いずれも通用します。その前の時代の柳沢吉保・新井白石をそれぞれ柳沢・新井と再表記するのは違和感があります。

田沼以後では松平定信は「定信」が一般的ですが、これは徳川氏一門でもあり将軍と同様の事情によるものと考えられます。水野忠邦は「水野」「忠邦」いずれも通用します。

以上のことは、「記述する」人の思い入れや歴史的なイメージによるものもあると思いますが、購読者の皆様には一度身の回りの日本史教科書や通史などを開いていただければと思います。

1. 田沼意次 {たぬまおきつぐ} の人間像

「田沼氏の盛んなりしときは、諸家の贈遺 {ぞうい=贈り物} 様々に心を尽 {つく} したることどもなりき。中秋の月宴 {ちゅうしゅうのげつえん=中秋の名月を楽しむ宴会} に、島台・軽台 (祝い用の飾り台) をはじめ負劣 {まけじおと} らじと趣向したる中に、ある家の進物は小なる青竹籠 {あおたけかご} に、活発にして大鱈 {きす} 七、八ばかり、些少 {さしょう} の野菜 {やそ=野菜} をあしらい、青柚 (あおゆず) 一つ、家彫 {いえぼり} 萩薄 {はぎすすき} の柄の小刀にてその柚を貫きたり。(中略) また某家のは、いと大なる竹籠に、しび (マグロの成魚) 二尾なり。この二つは類 {たぐい} 無しとて興 {きょう} になりたりという。」(出典「甲子夜話」)

この史料『甲子夜話』{かっしやわ} の著者は、肥前平戸6万余石藩主の松浦静山 {まつらせいざん、1760-1841年} です。

書かれた時期は、1821年から彼が亡くなるまでの約20年間です。

静山は1775年に15歳で藩主になりますが、ちょうど田沼意次の全盛期です。田沼は1767年に10代将軍家治の側用人に就任、86年に失脚・引退しているため、静山は青年大名として田沼時代を眺めたこととなります。

実際にその時代に居合わせた人物が書いたこの『甲子夜話』は、たしかに田沼時代を語る格好の史料ですが、ひとつ注意しなければならないことがあります。

それは、静山自身が、田沼政治を否定して寛政改革を断行した松平定信派の外様大名であるということです。(正室の兄が定信によって老中に抜擢された「寛政の遺老」の一人・松平信明)

歴史上の人物は、しばしば事実と異なる人物像がつくられ、悪人にされたり善人にされたりします。『甲子夜話』が描く田沼意次像も、こうした政治的な事情による虚像ではないかという説も近年あります。

田沼意次 (1719-88) の父・意行 {おきゆき} は、1716年に7代将軍家継が今の6歳に相当する幼さで死去して徳川本家が断絶し、和歌山 (紀州) 藩主の吉宗が8代将軍就任したとき、吉宗に従って紀州から江戸に出てきた足軽 (下級武士) でした。幕臣となった意行は小姓 (小性) として吉宗につかえ、昇進の末600石の禄高を得ます。

意次も9代将軍家重の小姓となり、1748年 (29歳) 小姓組番頭格 (将軍の親衛隊長)、51年 (32歳) 御側となって加増を重ね、58年 (39歳) 1万石の領地を得て、譜代大名になります。

その後、67年 (48歳) 側用人、69年老中格となり、遠江国の相良 {さがら} に城を築き、以後の加増で85年には5万7千石になります。

幕政の主導者になるまでの田沼は、1754年にはじまる美濃国の郡上一揆 {ぐじょういっき} の審議に将軍側衆として参加するなど有能な官僚 (能吏) の一人でした。この郡上一揆の審議の結果、郡上藩主で幕政の主導者への道を歩んでいた金森頼錦 {かなもりよりかね} は改易となり、当時の老中・若年寄らが罷免になります。(藩主が改易となり幕政の主導者らが処罰

された例は、江戸時代では他に例をみません。こうした判決に田沼が携わっていることは注目すべきことです。)

田沼は、子らに常々、交際においては誠心誠意尽すことが大事だと述べていた
すべきことです。)

田沼は、小姓から老中・大名へと破格の出世を遂げて20年間も政權の中樞にいたのですから、田沼は、誰もが一目置く存在、人格の持ち主だったと思います。

「父が和歌山藩の足輕から出発して、自分が生まれた時も300俵の旗本。そうした自分が譜代大名、しかも側用人・老中という幕臣の最高格にまで昇進できたのは、吉宗・家重・家治3代のおかげである。この御恩に報いるため身を粉にして幕政に尽くさなければいけない。」—田沼はそう思って政務に励んだと私は思います。

2. 田沼の重商主義

9代家重、10代家治は、いずれも吉宗に似ず、壮健さを欠く將軍だったため、大岡忠光{ただみつ}、ついで田沼らの側近が將軍の補佐役として重要な役割を果たします。

田沼が行なった政治の特色は、商業に重点をおく「重商主義」をすすめたことです。

幕府はもともと農業を基本とする「重農政策」です。しかし、すでに新田開発も限界に達し、年貢増徴だけでは幕府財政を安定させることが困難になってきました。そこで、意次は、農業にかわる財政安定策として、成長が著しい商業や商人のもつ力に着目します。

都市や農村の商人、手工業者などに広く株仲間を結成させ(当然、公認して)、彼らから売上税である冥加・運上{みょうが・うんじょう}を徴収して税収の増加をはかります。

また、幕府の企業化もはかります。銅座、真鍮{しんちゅう}座、人参{にんじん}座などを設けて製造・販売活動をはじめます。

安永年間(1772~80年)には、はじめての定量計数銀貨を鑄造します。

おもて面に「以南鐮八片換小判一両」(この銀貨8片で金貨1両とする)と刻まれた「南鐮式朱銀{なんりょうにしゅぎん}」です。

8片で1両(4分=16朱)ですから、その銀貨は2朱という金貨の単位をもつことを意味します。これには、西日本の「銀遣い」、東日本の「金遣い」という2大通貨圏を「金」に一本化するため、銀貨を金貨の価値体系に位置づけるねらいがあったとみることができます。

※「南鐮」は「良質の」という意味で、田沼時代に鑄造されたものは「安永式朱判」ともいいます。

通貨統一は次の松平定信政權によって否定され、それが実現するのは、実に1871(明治4年)新貨条例、97年の貨幣法(金本位制の確立)までまたなければなりません。

さらに田沼は、仙台藩医の工藤平助が献上した著書『赤蝦夷風説考{あかえぞふうせつこう}』を熟読し、「赤蝦夷」とよばれたロシア人との交易の可能性について調査します。けっきょく、ロシア人との交易をはじめると長崎貿易が衰退すると田沼は判断してこれを見合わせますが、

蝦夷地（今の北海道）を最上徳内 {もがみとくない、出羽出身の北方探検家} らに命じて調査させ、116万6千余町歩（約583万石に相当）の開発計画をたてます。

意次によって、幕府の北方対策がはじまったといえます。

同時に、中華料理の素材となる「いりこ・ふかのひれ・ほしあわび」を清国に輸出する「俵物」の増産もおこなわれます。

そして、商人のもつ財産・資本を導入して着手された一大プロジェクトが、今の千葉県の印旛沼・手賀沼の干拓事業でした。

このように、田沼の重商主義政策は、幕政の基本方針を大きく変えようとするもので、金本位制や産業・商業立国、北海道開発などは、100年後の近代日本を先どりするものでした。（近年では、田沼の重商主義政策は、町人請負新田で商人の力を活用した吉宗の政策を継承した面を強調する説があります。）

しかし、田沼の重商主義政策は、一方で賄賂 {わいろ} や金権政治の風をまねき、門閥譜代層や親藩の反発を背景に、田沼の子で若年寄の意知 {おきとも} が旗本の佐野政言 {さのまさこと} に江戸城中で刺殺されるという事件が起きます（1784年）。

さらにまた、「天明の飢饉」や「打ちこわし」・「一揆」が田沼の「失政」によるものとみなされ、失脚同然のかたちで田沼は老中退任に追いやられます。

領地はほとんどが没収され、孫の意明が相続することを許されたのは、わずかに1万石でした。

こうして田沼は、1788年、失意のうちに69歳で波瀾の生涯に幕を閉じました。

<整理ノート：18世紀の流れ>

- ・1709年：5代将軍（ 1 ）死去。→6代将軍（ 2 ）就任。
→儒学者（ 3 ）が政策立案者として登用された。
- ・1712年：6代将軍死去。→幼少の7代将軍（ 4 ）就任。
- ・1715年：（ 5 ）－銀の輸出額を制限。
- ・1716年：7代将軍死去（今の6歳に相当）→8代将軍（ 6 ）就任。
→「江戸三大改革」の最初に位置づけられる（ 7 ）を断行。
（ 8 ）－幕府機関で金公事の訴訟を停止。
（ 9 ）－民間の意見を広く集めるために設置した。
（ 10 ）－貧困者の救済をはかる医療機関として開設。
- ・1745年：9代将軍（ 11 ）就任。
- ・1760年：10代将軍（ 12 ）就任。
→側近の（ 13 ）が側用人、老中として幕政を主導。
- ・1786年：11代将軍（ 14 ）就任。
→将軍補佐・老中として（ 15 ）が寛政の改革を断行。
（ 16 ）－金融業者の（ 17 ）に幕臣への債権放棄などを命じた。
（ 18 ）－諸国からの出稼ぎ人の帰郷を援助した。
- ・1791年：（ 19 ）天皇との間の尊号一件が表面化。

- 1792年：ロシア使節（ 20 ）が根室に来航。
- 1793年：（15）老中、辞任。

1. 徳川綱吉、2. 徳川家宣、3. 新井白石、4. 徳川家継
5. 海舶互市新例、6. 徳川吉宗、7. 享保の改革、8. 相对済し令
9. 目安箱、10. 小石川養生所、11. 徳川家重、12. 徳川家治
13. 田沼意次、14. 徳川家斉、15. 松平定信、16. 棄捐令
17. 札差、18. 旧里帰農令、19. 光格、20. ラクスマン

))))))

♪高校日本史講座☆1373 (2009-12-07)

○●)))))

●○

09年テーマ史：日本史受験重要事項（人物編14<19世紀>島津斉彬・久光）

((((

人物編14「島津斉彬 {なりあきら}・久光 {ひさみつ}」

0. 島津氏

島津氏は、鎌倉時代から幕末まで九州南部を守護や大名として支配していた、他に例をみない有力外様大名です。戦国末期には九州全土の制覇に乗りだし、1587年に豊臣秀吉に服属、1600年の関ヶ原の戦いでは西軍に属して敗北したものの領地（薩摩、大隅、日向の一部）を削減されることなく安堵 {あんど} され、幕末に至ります。

1609年には琉球に侵攻して事実上支配下に置いています。

島津氏は外様大名でありながら、将軍家とも姻戚関係をもち、5代将軍綱吉の養女を正室に迎え、11代将軍家斉の正室は島津重豪 {しげひで} の娘、13代将軍家定の正室は島津斉彬 {なりあきら} の養女（篤姫）です。

また、島津氏の先祖が平安時代に摂関家の荘園を管理する地頭でもあったことから、京の近衛家 {このえけ、藤原氏の五摂家の筆頭} とも深い関係にありました。

薩摩藩の中興の名君とされるのが、島津重豪 {しげひで、1745-1833} です。重豪は斉彬 (1809-58)・久光 (1817-87) の曾祖父にあたりますが88年の長命を保ったため、斉彬に深い影響を与えています。重豪死去の時、斉彬は24歳でした。今で言えば祖父とその孫の年齢差に似ています。

1826年、西洋の文化にも関心があった重豪は少年時代の斉彬を連れて江戸に参府したオランダ商館医のドイツ人医師シーボルトとも面会しています。

この時、重豪の実子で豊前国中津藩主の奥平昌高 {おくだいらまさたか} も同行しています。昌高は「蘭癖 {らんぺき} 大名」ともよばれる熱心な蘭学者であり、こうした西洋文化を愛好する気風をもつ中津藩から福沢諭吉が出ています。

重豪は子・孫（斉彬の父）に藩主の地位を譲った後も藩政を主導し、晩年には下級武士の調所広郷 {ずしよひろさと} を登用しています。調所は薩摩藩の財政再建に成功にしたことで知られます。(500万両を無利子で250年で支払うという「事実上の借金の踏み倒し」といった

強引な方法などをとりましたが。)

1. 島津斉彬と雄藩連合

斉彬は、父・斉興 {なりおき} が薩摩藩主になった同年に江戸で生まれます。

少年時代の斉彬は曾祖父・重豪から将来を期待され、40歳をこえて藩主に就任するまで江戸で生活します。父は藩主のため参勤交代で国元にしばしば赴いたため斉彬の方がより長く江戸の空気を吸い、のちに幕府の主導者や他藩の開明的な藩主らと交流する基盤を築くことになりました。

斉彬の異母弟として鹿児島で生まれたのが久光です。母は由羅 {ゆら} の方で、斉彬を廃嫡して久光を藩主にしようとして起きた「お由羅騒動」で知られます。この事件で斉興は隠居して斉彬が藩主となり、久光は処罰されなかったものの、斉彬死後も藩主にはなれず、かわって子の忠義 {ただよし} が藩主となり久光はその後見者としての立場で幕末・維新の舞台で活躍することになります。

1851年に藩主となった斉彬は、国元の薩摩に集成館 {しゅうせいかん} と総称される洋式工場群の建設に着手します。日本初の蒸気船を製造したのも薩摩藩でした。多くの技師を雇い入れ、産業で藩の財産をふやし、武力を充実させるという政策は、明治期の「殖産興業・富国強兵」を先どりするものでした。

同じ時期、わが国にペリー来航にはじまる未曾有の国難が押し寄せます。

こうした世界情勢について斉彬は、琉球経由の中国（清）からの情報、幕府・長崎経由のオランダからの情報、そして薩摩が太平洋に面することから得られる情報を適確に分析することができる位置にいました。

斉彬は、幕府老中の阿部正弘、越前藩主の松平慶永 {よしなが}、水戸家の徳川斉昭 {なりあき}らと交流をもち、雄藩が力をあわせて国力の増強につとめて国難に対処すべくつとめます。そして、この雄藩連合の盟主（将軍）に優れた人物を選ぶことを志向します。こうして彼らが白羽の矢を立てたのが斉昭の子・慶喜（一橋 {ひとつばし} 家に養子入り）でした。

雄藩連合と異なる立場に立ったのが、譜代大名の代表格の井伊直弼 {いいなおすけ、彦根藩主} で、従来の幕藩体制の維持につとめます。

日米修好通商条約をめぐる争いも、開国賛成か反対かが焦点ではなく（水戸斉昭も開国やむなしと判断しています）、国家の指導体制をめぐる意見の相違が根底にあったといえます。

●一橋 {ひとつばし} 派：従来の慣例にとらわれず、外様雄藩や有能な幕臣を抜擢 {ばってき} して国難に対処する雄藩連合や、その盟主として、徳川（一橋）慶喜の将軍就任を志向した。

- ・島津斉彬－薩摩藩主。
- ・山内豊信 {やまうちとよしげ} －土佐藩主。
- ・伊達宗城 {だてむねなり} －伊予国の宇和島藩主。旗本から養子入り。

- ・松平慶永 {まつだいらよしなが} 一越前藩主。父は11代将軍家斉の弟で一橋家から田安家へ養子入りし、慶永は田安家から越前・松平氏に養子入り。血筋では、8代将軍吉宗の玄孫（孫の孫）にあたる。
- ・徳川斉昭 {なりあき} 一水戸徳川家の当主。15代将軍慶喜の父。

- 南紀 {なんき} 派：従来の慣例を重視し、譜代大名が幕政を主導して国難に対処する。その盟主として、11代将軍家斉の孫にあたる徳川慶福 {よしとみ} の将軍就任を志向した。
 - ・井伊直弼 {いいなおすけ} 一彦根藩主。

この両派の争いは、13代将軍家定の判断で大老に就任した井伊の即断的な通商条約調印・14代将軍決定（慶福は家茂と改名）によりピリオドを打ち、一橋派の人々は謹慎処分追い込まれます。

薩摩に帰国していた斉彬は、武力での政権奪取をはかるため江戸に攻め入る準備をするなか、49歳で病死します。

斉彬の手となり足となって「将軍慶喜」の実現に奔走した西郷隆盛は幕府（井伊政権）の追求を受けて鹿児島湾に投身自殺を図ります。

（10年後、西郷は慶喜を追討する新政府軍の責任者として江戸城に迫ることになります。）

2. 「薩摩の国父」 島津久光

斉彬が果たせなかった悲願は、皮肉にもかつて自らの藩主就任を阻 {はば} んだ由羅の子（斉彬の異母弟）の島津久光が継承することになりました。

兄・斉彬の死去時に男子がないため、その藩主の地位は久光の子・忠義 {ただよし} が継ぎ、久光はその実父（国父）として藩政を主導します。

久光は、斉彬が登用した西郷や「お由羅騒動」で自身の政敵として処罰した大久保家の利通を登用します。

1862年、公的に藩主の地位をもたない久光は、孝明天皇の幕政改革の命令をうけた勅使の大原重徳 {しげとみ} を警固するという形式をとって江戸に入り、かつて斉彬が描いた雄藩連合の構想を実現すべく幕政改革を迫ります。

一橋慶喜を将軍後見職、松平慶永を政事総裁職（当初の要求は大老）に任命するよう求め、これを幕府に実現させます。（文久の改革）

（兄の斉彬が親交を深めた松平慶永や将軍として推した慶喜を幕政指導者に就任させた。）

しかし、時代の流れは、下級武士層による尊王攘夷論が京都の政界を占めるようになり、その京都に入った久光の行列は時勢の変転に驚いたことでしょう。

（その帰途、久光を警固していた薩摩藩士が横浜郊外でイギリス人を殺傷する生麦事件が起こり、翌63年の薩英戦争の原因になります。）

以後も久光が主導する薩摩藩は雄藩連合を実現すべき立場で行動し、1863年の八月十八日の政変、翌64年の蛤御門の変などで尊王攘夷派の中心である長州勢力を排除・粉碎します。

久光は、幕政改革は必要としながらも、身分の秩序を揺るがすような攘夷論者らの行動は嫌

悪していました。62年の江戸入りに先立って京都の寺田屋で家来の有馬新七らを討たせたのもこのためでした。

しかしやがて幕末の政局は、大名層の団結（久光らの参預 {さんよ} 会議）から藩の枠組みをこえた武士層が主導権を握るようになり、薩摩の西郷・大久保らも武力討幕をめざすようになります。

歴史は、しばしば関係者らが思いもよらなかった結果をもたらすことがあります。戊辰戦争の始まりを告げる鳥羽・伏見の戦いも、薩長軍（新政府軍）の当初の目的は旧幕府の軍事的な中心勢力であった会津藩の松平容保 {まつだいらかたもり} を排除することだったと考えられますが、この戦いは予想をこえた大勝利となり、慶喜の脱出（江戸に帰還）、ついで東日本を戦場とする戊辰戦争へ展開し、わずか1年数か月で日本全土は新政府軍の支配下に置かれました。

久光は、こうした激しい歴史の変転に驚いたのではないのでしょうか。

明治後の久光は、1887年（明治20）に死去するまで保守派の象徴としての姿勢を貫きます。髷 {まげ} はそのまま和服を着て帯刀して過ごします。

廃藩置県（1871年）が断行された時は、憤りを示すために鹿児島湾で花火を打ち上げたそうです。

久光は旧家臣の西郷・大久保を、薩摩藩の軍事力で幕府を倒しながらその藩を消滅させた「裏切り者」とみなしたとされます。

西南戦争の時に久光は鹿児島にいましたが、「裏切り者」の西郷に味方することはありませんでした。

久光の子・忠義は、昭和天皇の皇后となる良子 {ながこ、香淳皇后} の祖父（母の父）にあたります。したがって、久光は現天皇の玄祖父（祖母の祖父）にあたります。

現天皇は、2003年（平成15）12月の誕生日直前の記者会見で「私にとっては沖縄の歴史をひもとくということは島津氏の血を受けている者として心の痛むことでした。」と述べています。

斉彬・久光の歴史における役割は、幕末・維新期の主導者となる徳川慶喜、西郷隆盛、大久保利通らを歴史の舞台に引き上げたことにあります。

また、久光自らは不本意に背負い込んだ薩英戦争が、国内の攘夷主義者らに攘夷の無謀さを知らしめたことも重要だと思います。

<整理ノート：19世紀の流れ（幕末まで）>

- ・1804年：ロシア使節（ 1 ）が長崎に来航。
- ・1808年：イギリス船（ 2 ）号がオランダ船攻撃のため長崎に侵入。
- ・1825年：幕府、（ 3 ）を発令。
- ・1837年：アメリカ商船（ 4 ）号を砲撃。
→これを批判した洋学者の（ 5 ）・（ 6 ）らを処罰。（蛮社の獄）
- ・1837年：大坂町奉行所の元与力 {よりき}（ 7 ）が反乱。

- ・ 1846年：アメリカ使節（ 8 ）が浦賀に来航。
- ・ 1853年：アメリカ使節（ 9 ）が浦賀に来航。
- ・ 1854年：（ 10 ）、調印。当時の老中首座は（ 11 ）。
- ・ 1858年：（ 12 ）、調印。当時の大老は（ 13 ）。
- ・ 1860年：（ 14 ）－大老が水戸脱藩士らにより殺害。
- ・ 1862年：（ 15 ）－老中安藤信正が負傷。
- ・ 1862年：薩摩藩主の父（ 16 ）が江戸入り。（文久の改革）
- ・ 1863年：（ 17 ）－イギリスが薩摩藩を攻撃。
- ・ 1863年：（ 18 ）の政変。
- ・ 1864年：（ 19 ）の変 →第1次長州征討が始まる。
- ・ 1866年：（ 20 ）－薩摩藩と長州藩が提携。
→第2次長州征討で幕府側が敗退。
- ・ 1867年：15代将軍慶喜、（ 21 ）を上表。
- ・ 1867年：王政復古の大号令。（ 22 ）会議。
- ・ 1868年：（ 23 ）の戦い →戊辰戦争の始まり。

1. レザノフ、2. フェートン、3. 異国船打払い令、4. モリソン
- 5・6. 高野長英、渡辺崋山、7. 大塩平八郎、8. ビッドル
9. ペリー、10. 日米和親条約、11. 阿部正弘
12. 日米修好通商条約、13. 井伊直弼、14. 桜田門外の変
15. 坂下門外の変、16. 島津久光、17. 薩英戦争
18. 八月十八日、19. 禁門（蛤御門）、20. 薩長同盟（薩長連合）
21. 大政奉還、22. 小御所、23. 鳥羽・伏見

今シリーズの内容-----

- 6世紀－大王継体と磐井、7世紀－持統天皇（アジアと女性の王）
- 8世紀－藤原仲麻呂（錯綜の人生と奈良朝）、9世紀－菅原道真
- 10世紀－源信、11世紀－源頼義、12世紀－後白河法皇
- 13世紀－北条時頼、14世紀－足利尊氏・直義（頼朝・泰時の後継者）
- 15世紀－山名宗全、16世紀－織田信長、17世紀－徳川光圀
- 18世紀－田沼意次、19世紀－島津斉彬・久光

♪高校日本史講座

創刊－2000年3月／発行－2009年12月07日

発行者／松井秀行

メルマガ登録解除ページ

<http://homepage2.nifty.com/mazzn/tandk.htm>

発行：まぐまぐ、めろんぱん、カプライト

♪高校日本史講座☆1373 人物編 1 4 島津斉彬・久光